
IS 復讐を願った少女

抹茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 復讐を願った少女

【Nコード】

N7578V

【作者名】

抹茶

【あらすじ】

彼女は自分自身の弱さを呪ってしまった。故に力を望んだ。

だが数年経っても自分の両親を殺したISの情報は見付からず途方にくれていたが、ある日の仕事の終了後織斑一夏の噂を聞き「この男に纏わり着けばあのISに出会えるのか？」と思い彼女はIS学園へと入学していった。

そしてこれが彼女が変わる切欠だったとは誰も予想する事が出来な

か
っ
た

プロローグ（前書き）

抹茶「新しい小説を作成しました。不定期更新では有りますが如何
かお楽しみ下さい」

女主人公？「と言っても主は此方もちゃんと書くつもりでしょう？」

抹茶「なっ！？そ・・・それは秘密だ」

女主人公「ふふっ、まあ良いわ。さて本編入りましょう」

抹茶・主人公「それでは本編をお楽しみ下さい！」

プロローグ

〈夢〉

彼女は独り泣いていた。自分を育ててくれた父親・母親を前にして泣き続けていた。

だが幾ら泣き続けても両親は帰ってこない。それ所か、自分の家だったものが自分の周りを取り囲んでいた。

「何で…私だけ生き残ったの？私みたいな異端捨てればよかったのに！」

と彼女は泣き続けながら自分の両親の亡骸を前にしそう言った。

そして彼女は自分自身を呪ってしまった。自分の無力さで大切な人を殺してしまった。

こんな辛い思いをするなら大切な人等創らなければ良かったと。

そして彼女は同時に復讐を誓った。

この惨状を造り上げ、私には見向きもせずは何処かへと去っていった異型な形をした。ISへと……

〈夢 END〉

「また久々に懐かしい夢を見てしまいましたね」と彼女は其処で目を覚まし、背伸びをしていた。

そう彼女は、未だにあの夜全てを奪っていったISを探し続けて居

ただ。

だが幾ら探し続けても異型のISは見付からず途方に暮れてしまっていた。

彼女も最初は親の遺産で何とか食い繋げては居たが、遂には限界が来てしまっていたのだ。

流石の彼女も人間なので何かをして金を得なければ成らないと考え傭兵稼業を始めた。

最初は彼女自身も人殺しに躊躇いを覚えたが一度殺す感覚を得ると案外馴染む物だった。

「さて、今日も仕事を始めますかね」

そう言って彼女は独自に造り上げたPCの電源を入れて、依頼を確認し始めた。

そこには、紛争地での拠点制圧・一騎打ち・強襲作戦・誘拐・暗殺等色々な事が張り出されている

ようは傭兵専用の職場のような物だった。そして彼女は何時も通り慣れた手つきで仕事を探し始めた。

だが彼女の最優先は異形のISであり親の仇を探すように張り出されている情報の中に無いか探した。

しかし目的の情報は見付からず「今日も見付かりませんか…」と諦め報酬の高い仕事を探し始めた。

そして彼女でも楽にこなせる良い物を見つけてしまった。

其処に書かれていたのは「紛争地帯の特定のエリアに存在する人間の排除」と書かれていた。

だが少しだけ疑問を覚えてしまった事が起きてしまった。そう其処は彼女が何度も依頼場まで進む時に何度も通りかけていた場所だ。

だが彼女は、何度思い返しても其処には平地しかない事しか思い出せなかった。

「まあ相手側が何を考えているかは知りませんが、私は傭兵なのですから気にする必要はないですね」と依頼の受注し衣服を着替え始めた。

元々彼女は一人暮らしなのでもう既に他人の目を気にする事は無いが最初は恥かしかつた物だと考えてしまった。

そして徐々に裸の状態でガラスの目の前まで立ってしまった。

「全く昔の私は何を遣っていたんでしょうね？」と自分の体を見てそう呟いてしまった。

そう彼女の体には、既に幾つかの怪我の後が残っていた。

銃痕・切り傷・火傷等多く有ったが一番目に着いたのは、胸に残る手をつ突っ込んで何かを埋め込んだような後だ。

傭兵の依頼で運が悪い時には相手側もISを使ってくる事も有るの

だが、この傷は戦闘では着くのは有り得なかった。

だがこの傷は、彼女自身が自分から望んでしまった力の代償なのだ。彼女自身既に女と言う概念は其処まで無く。

自分はただ戦う為に必要な部品としか考えていないのだ。

だがそうやって動いていた時に一度「気持ち悪い」と言われたのを気にしISスーツはダイビングスーツのように首から下が見えない様にしていた。

「さて此方の準備は整いましたね。行けますか？ジ・エンド」と手を胸に置き自分のISへと尋ねた。

「何時でも行けますマスター」と言われたので彼女は何時も通りISを展開し、家を後にした。

「位置は此処で良いの？」と彼女は目的の位置を訪ねた。

「はい、此処ですね。此処から半径5km以内の危険分子を全て排除せよとの依頼です」と改めて依頼内容を確認完了した所で

「「ミッションスタート」と言うAIと自分の声が見事にハモリ動き始めた。

最初はただの見回り程度ですんでいたのだが半径3kmの距離に成つてから敵の数がチラホラと確認する事が出来てしまった。

「マスター 敵兵3 いづれも此方には気付かずに居ます」とAIが正しい情報を送り込んでくれる。

「そう、ありがとうねジ・エンド じゃあスナイパーライフルを展開してくれる？」とAIに頼みこんだ。

次の瞬間右手にずっしりとした重みを感じ彼女は、相手に気付かれない高台に陣取り兵士3名を狙いこんだ。

「悪いわね。これも依頼だから死んでね」と言つて慣れた手つきでライフルのトリガーを引いた。

次の瞬間男の一人が頭から血を流し倒れた。その瞬間2人が慌て始めるが彼女は慌てず冷静に二人目の心臓を撃ち抜き殺した。

三人目は、見えない敵に恐怖したのか逃げ出そうとしていたが

「逃がしませんよ」と言つて最後の1人にも照準を合わせトリガーを引いて頭を撃ち貫く

「ナイスショットですマスター」とジ・エンドが褒めてくれるが

「IS相手じゃないのに褒めてもらつても全然嬉しくありません」と3人の亡骸に興味が無いように目を背け再び周りを警戒し始めた。

だがこれ以上敵が見付からないので依頼完了となつたので彼女は依

頼主に完了の意思を告げ自宅へと戻っていった。

そして久々にテレビを着けた時には「IS 初の男性の適合者！」
と言うニュースがやっていた

彼女はふと思ってしまった。

（自分が狙われたのは、何処の世界でも確認されなかったISのせい。つまりこの男に纏わり着けばあのISに会えるか？）と考え始めた。

そう彼女が狙われた理由は、自分が持っている468番目のISの存在のせいだろう。

だが彼女は、気づいた時にはこの世界に存在しており

自分の持っていた製造者の謎な468番目のISの適合者であっただけだ。

そして彼女はこの存在を知られる訳にはいかないと思いつ自分の体内へと埋め込んだのだ。

「ジ・エンド 次行く場所を決めたよ」と彼女は自分のパートナーへとそう言った。

「日本に行くのですねマスター 何処までも着いていきますよ」と賛成のようだった。

（まあNOと言ってもジ・エンドと私は一心同体ですから離れられないんですよね）

と彼女は苦笑しつつも荷物を纏め始めた。

その目的は日本のIS学園への入学

そして彼女の予想は見事に当たり、織原 一夏との出会いによって
自分が変わるとは、誰も予想していなかった。

プロローグ（後書き）

抹茶「今回の題材は復讐です！正直嫌なタイトルにも見えますが、最後には変わる予定です」

主人公「そう…でも私はあのISは絶対に壊す！」

抹茶「とこんな感じに怒りに燃えていますますがきつと最後には変わるでしょう」

主人公「そんな事は有り得ないと思うわ」

抹茶「多分彼女はツンデレなんですネ判ります」

主人公「速めに作者から倒した方が良いかしら？」

抹茶「落ち着けよ。さてそろそろ閉めようか」

抹茶・主人公「それではまた次回に会いましょう！」

人物・専用機紹介（前書き）

抹茶「はい、今回は主人公とES説明をしておきます。…これも子
「トじゃない筈」

人物・専用機紹介

名前：岡田 美空（ただしIS学園での偽名） 本名： 姓 クロ
ムウエル 名 フェリシア

性別：女

身長：148.2cm

体重：47.8kg

姿：緋弾のエリアに出てくるレキ

好きな物・事：花全般・アロマセラピー

嫌いな物・事：実力の判ってない人

一人称：私

性格：冷静沈着 特徴：戦闘狂でも有るが、依頼や厳しい戦いの時は冷静に対処する

戦闘時：チームを組んでいる時は、味方の動きに合わせて動く。
また自分が攻撃するよりも味方の援護に勤める事も多く、援護防御等も状況によって行う事がある

ソロの場合基本格闘戦で攻撃を仕掛ける。（弾薬代節約の為）

IS適正：S（名目状S適正 本当は測定不能な適正レベル）

専用機 I S 第四世代 名称：ジ・エンド（終焉） 一人称：僕

待機状態：体内の心臓に近い場所に有り 形は十字架

特徴：自分で考え喋れる機能・戦闘補佐等

展開時：胴体・腕・脚はコードギアスで出てくるグロースター 色彩：黒

（一般兵用・前面の胸の突起・後方のバックパックは無し）

頭部：ペルソナ3で登場したペルソナ・タナトスのカブト 色彩：銀

外部から見えるのは正面からギリギリ唇が見える程度

背中：ペルソナ3で登場したタナトスの持っているチェーンの着いた棺桶を8基装備

棺桶の裏面にブースターを2個ずつ着けている。

一応自分の全面に展開出来るので、盾としても使用可能

特徴：体内に I S を埋め込んだせいも有るのか I S の自動修復が肉体にも使用。骨折程度なら二日程度で完全完治 ただし、傷跡までは消せない。この事は本人も知られたくないので隠している

ワンオフアビリティ
単一仕様能力

ナイトメア・ナイン
『九つの悪夢』

能力：チェーンから棺桶を外し自分の前面に全て出す。

シールドエネルギーを消費するが、消費した分だけ自分の実体を持った分身が出せる

だいたい一つに着きシールドエネルギー40消費

出せる数は最大八つまで

メリット：自分と同じ思考を持ち、武装も展開し攻撃支援を行ってくれる

デメリット：分身が消えた時分身が受けた痛みの3割を自分も受ける

武装

対IS・人間用射撃武器

P90 x 1 UMP45 x 1 TAR-21 x 1 デザートイーグル
ル x 2 RPD x 1 AA 12 x 2 Intervention
n x 1
AT4 - HS x 2

両腰：小型荷電粒子砲

右肩：グレネードランチャー

左肩：誘導型ミサイルポッド（最初は4発その後分裂し1発のミサイルの中から8発のミサイルが発射される）

対IS・人間用格闘武器

クリムゾンエッジ（フルメタル・パニック M9ファルケの武器参照）

コンバットナイフ x 2 スラッシュハーケン（コードギアス参

照）

ハルバート（斧の部分をチェーンソーのように回転仕様）

ビームサーベル×2 クレイモア×1（形はMHのキングテスカ
ブレイド参照）

肘・膝・つま先 刺突・斬激用ナイフ（用は膝蹴りの時に致命傷を
与える効果）

武装の入手経由は、IS学園に入る前の傭兵時代に多くの武装を購入・任務終了後死亡した敵兵から奪取等を繰り返していた。常に弾薬を節約して戦闘しているので依頼金額の3割ギリギリ要るか要らないか程度の弾薬代で済んでいるので仮に全部の銃弾を使っても再補充可能な金額が口座の中に入れてある。

第一話 IS学園入学試験（前書き）

抹茶「はい第一話完成」

フェリシア「主は此れをずっと書きたかったの？」

抹茶「そうなりますかね。そう言えば俺は本名と偽名どっち使って良いんだ？」

フェリシア「主は本名で良いわよ。それより今回はどんな話に成るのかしら？」

抹茶「其れはですね。題材に書かれている通り入学試験です」

フェリシア「つまり戦闘シーンが有るのね？血が滾るわね」

抹茶「そういえば貴方は戦闘狂でしたね。それじゃさっさと本編入りましょつか」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみ下さい！」

第一話 IS学園入学試験

「ふう…此処が日本ですか、思ったより平和すぎますね」そう呟きながらIS学園へと向かった

「何を物騒な事を言っているんですかマスター 日本は平和を目的とした国家ですよ？つまり今まで僕達が居た世界とは全く真逆の存在です」とジ・エンドが丁寧に教えてくれる

「そんな事位私でも判りますよ。ただ何時も戦地に身を置いてた私からすれば違和感を感じすぎて嫌なんです」

「まあ、マスターの言いたい事は判らない事も無いですが、取り敢えずは目的地まで急ぎましょう」

「そうですね。此方からアポイントを取っているとは言え入学試験は1週間前に行われて有り得る筈が無いんですから」とフェリシアは言いながら早歩きでIS学園へと向かった。

本来ならば彼女も先週行くつもりで居たのだが、少々自分宛の依頼が幾つか送られてきたので『少し事故を起こしたので少し遅れてIS学園へと向かう』と伝えておいたのだ。当然此方が悪いとフェリシアも思っていたので小切手では有るが幾らかの謝礼金を送りつけておいた。

「此処がIS学園ですか…思ったより大きいですね。まあISの訓練するんですから此れ位の大きさも必要ですかね？」とフェリシアは一人納得していた所を

「お前が岡田 美空か？」

と後ろから声を掛けられ振り向くと其処には鋭い目付きをした女性
が立っていた

「ええ、そうです。貴方が当日会う予定だった織斑千冬先生でしょうか？」

と改めてフェリシアは確認を取っておいた。

因みに彼女は、IS学園には偽名を伝えている。特に大きな理由は無いのだが、此れは彼女の拘りだ。彼女にとって本名は死んでいった家族との最後の繋がりと考えており、信用出来ない者には教えず呼ばせたりもしないのだ。

そして許してない人に本名を呼ばれたら殺すとまではいかないが、二度と名を呼べないほどに恐怖を与えようと思っているのだ。

「ああ、そうだ。それよりも予定より1週間ほど遅かったが何か有ったのか？」

と何か勘ぐってくるが

「ほんと色々と有りましたよ。まあ強いて言うなら面倒な害虫駆除でもしていたとでも言いましょつかね」と面倒くさそうに答えておいた

「そうか、深くは聞かないがほどほどにしておけよ？」

と鋭い眼光で睨みつけられたが、彼女にとってその程度の眼光など何度も戦場で見た事が有るので怯みもしなかった。

「ええ、そうして頂けると凄く助かります。それより黙秘権を使っても良いので一つ聞いておいて良いですか？」と彼女も少しだけ気になっていたことがあった

「何だ？極秘の件以外だったら成るべく答えるようにするぞ？」と如何やら質問に答えてくれるようだ

「そうですね、有難う御座います。では織斑一夏さんと織斑千冬先生は同じ苗字ですが、知り合いなのですか？それとも家族ですか？」と正直聞かなくても判りそうな気がするが、結構気に成っていた。

「その事か、アイツは私の弟だ。学園に入学したら仲良くしてやってくれ」

「それについては了承出来るか相手次第です。一夏さんが此方の怒りに触れなければ良いですよ」

そうフェリシアも言ったが正直仲良くする気は毛頭無い。自分の復讐対象さえ見つけて破壊できればこの国この学園には用等無いと言っても良いのだ。

「そうか、ただ一つ忠告しておいてやるアイツに会う時は、心を強

く持て。あれは未熟者の癖に如何してか、妙に女を刺激するのだ。油断すると惚れるぞ？」と何処か嬉しそうにそう言ってきた。

「そうですか。…でも其れは、有り得ないですね。私はもう女性と
言う概念は捨て切っていますから」

と彼女は最後の部分だけ何処か悲しそうに聞こえないようにそう呟いた。

例え織斑先生の言った事が事実でも自分を好きに成れる人物が何処に居るだろうか？正直有り得ないと言いついても良いほどだ。それに自分は裏の人間…裏の人間が表の人間と深く関って良いはずが無い。

「それよりも今回入学試験に当って教員一人と戦うのだが、岡田は打鉄うちがねとラファール・リヴァイブどちらを使うんだ？」と準備の為に確認を取ってくるが

「失礼ですが織斑先生 私は専用機を持っているので用意しなくて結構です」

「何？専用機持ちだと何故言わなかったんだ？」

と怪訝そうな顔をしていた。どうやら準備をしていたのだが無駄に終わった事と自分が専用機持ちだと言いつ疑問が混じっているのだろう

「それは、聞かれなかったからですよ。それに自分の情報を堂々と晒す阿呆が何処に居るんですか？」

「全く、それは屁理屈と言つんだ覚えておけよ岡田。…次回からはちゃんと情報を伝えるようにな？」

と有無を言わさず威圧感たっぷり含んで言ってくる。さすが第1回

IS世界大会優勝者だ流石にこれ以上食らうのは正直キツイ

「申し訳有りません。次回から成るべく気をつけます」と流石のフェリシアも素直に謝っておいた。

「成るべくか・・・まあ良い。ISスーツは持ってきているな？無かったら此方で支給している物を渡すが？」と心配して物まで支給してくるようだが

「大丈夫です。此方で専用のISスーツは用意しているので必要ないです。それよりも今回戦う教員の使うISを教えて貰えますか？」とフェリシアも相手の情報が無ければ、戦闘の対処は使用が無いのだ。

「それは、見てからののお楽しみと言いたい所だが情報位はまあいいだろう。取り敢えず相手が使うISはラファール・リヴァイブとだけ言っておこう」

「そうですね、それでは再びアリーナで会いましょう」と言って更衣室に向かってフェリシアは歩き始めた。

「ジ・エンド 聞こえてる？」「聞こえてますよマスター どうかしましたか？」

「今回相手はラファール・リヴァイブだから武装の選択は貴方に任しておくわ。…あとの織斑千冬IS乗っては無かったけど、隙が一切無かったわね」

と徐々にフェリシアの戦意に火が着いていた。今まで戦ってきた相手は少々てこずる敵も居たが、それだけだ。

彼女は、自分より実力が同等・それ以上の人物と余り戦った事が無いので、何時か戦う事が楽しみだと思ってしまうた。

そして彼女は、自分の全身を包むISスーツを着込んだ後アリーナ内へと入り始めた。其処にはラファール・リヴァイブを装備して待機していた、緑色の髪をしてメガネを掛けていた女性が居た。

「こんにちは、岡田さんですね？私は山田真耶です。それでは試験を開始しましょうISを展開してください」

「判りました。………来てジ・エンド」そう呟いた次の瞬間には自分の全身に装甲が展開され始めた。

そこには銀色の歪な形をした被り物・黒き無骨な装甲・そして背中にはチェーンが着いた8つの棺桶が目が付いていた。他人からすれば確実に変なISと言われていただろうが彼女にとっては自分の大切なパートナーなのだ。

「変わった形をしたISですね。それに全身装甲とは」と感嘆しているようだが、此方は此方で余り嬉しくない事が起きていた。

（ねえ、ジ・エンド。確かに装備はそつちで任せると言ったけど此れで勝たなきゃ駄目なの？）
と自分のパートナーにそう話しかけていた。

一応フェリシアとジ・エンドは既に融合しているので声に出さなくてもそう思うだけで話すことが出来るのだ

（おやマスターは、それだけじゃ心苦しいとでも？それではもっと

装備を増やしましょうか？)

と嫌がらせのように言ってくるが

(言ってくれるじゃないジ・エンド 良いわやってあげるわよ！でも何時も通りサポートも宜しくね)

と頼み込んで目の前の敵に対して集中した。

彼女が今回用意された武装はコンバットナイフ×2 スラッシュハ
ーケン 機体の肘・膝・つま先に着いた刺突・斬激用ナイフだけな
のだ。一応準備の為にコンバットナイフを逆手持ちにしておく。

「それでは、良いですか？」と確認を取ってくる

「何時でも、どうぞ」と返事をした。

「今から入学試験を開始する！ブザーが鳴ったら戦闘開始だ！」
と中継室から織斑先生の声がスピーカー越しに聞こえる。

そしてスリーカウント後戦闘開始のブザーが鳴り始めた。

すぐさまフェリシアは、音が鳴ったと同時に既にイグニッション・ブースト瞬時加速を使って
リヴァイブとの距離を縮めていた。

だが山田先生の反応も早く先生もまたイグニッション・ブースト瞬時加速を使って距離を開き
アサルトライフルを展開して連射してくる。

だがフェリシアからすれば距離を開けたのは正解だと思ったが、正
直言って開く距離が短すぎているとフェリシアは思ってしまった。
何故ならフェリシアは、未だに瞬時加速を続けているからだ。

多少銃弾がISに被弾するが、シールドエネルギーが削られる、ただ其れだけの事だ。先生の方も当るとは予測していなかったのだから少々啞然としつつも未だに弾は連射していたが、遂にフェリシアのレンジに入った。

すぐさま先生も距離を取ろうとするが

「遅い！」と言ってアサルトライフルにコンバットナイフを突き刺し銃としての機能を壊した。

咄嗟の判断でアサルトライフルを手放して距離を取ろうとするが、フェリシアは其れを許す事無く手に着いているスラッシュユハーケンを山田先生に巻き付ける。

そして一気にワイヤーを巻き山田先生との距離をゼロ距離にし、脚払いを仕掛ける。当然少し浮いて避けられるが、そのままフェリシアは肘打ちを喰らわせながら先生を押し倒しコンバットナイフを首元に着き付ける。

「私の勝ちです山田先生。負けを認めてください」と聞いたら身震いしそうな位冷やかな声でそう言い放った。

「はい、判りました。と言うか岡田さん離れてもらえますか？ISのシールドバリアーがどんどん膝と肘のナイフで削られてるので」と両手を挙げ降参のポーズをとっていた。

「あつ、此れは失礼しました」と言って起き上がり山田先生に手を貸して起き上がらせる。

当然彼女も押し倒している間は、攻撃する気は無かったつもりでだ

ったが、やはり戦場に居た頃を思い出し隙が有る間に攻撃を続ける
と言う条件反射が体に染み込んでいるのだろう

そして後ろからパチパチと拍手が聞こえるので後ろを振り向いたら
織斑先生が居た。

「おめでとう岡田 今更通知表を渡す事をしなくて良い位合格だ。
しかし射撃武器はそのISには搭載されていないのか？」

「いえ、一応射撃武器は搭載されては居ますが、使わなかっただけ
です」と言った次の瞬間

パン！と何処から取り出したのか謎な出席表で頭を叩かれた。

「馬鹿者 慢心するな。慢心は死を呼び込むだけだぞ？」
と自分のためを思ってそう言って来てくれるのは嬉しいが

（マスター あの出席簿何で出来てるんですかね？シールドエネル
ギーが少々減っているんですが？）
とジ・エンドが少々怖がりながらそう言ってくる

（知らないわよ。ただ生身では受けたくないわね。ある意味怪力女
？）

とおもった次の瞬間

パン！と再び出席簿で叩かれた。

（何故判ったんだろう？）と少々疑問に成りつつもISを解除した。

「取り敢えず、もう荷物は持ってきているのだから？これが鍵だ一個

しかないから無くすなよ？」

と言われながらも鍵を受け取る。そこには1234号室と書かれた鍵だった。

余りに準備が良すぎるが合格できると織斑先生もある意味確信していたのだらう。

「有難う御座います。お疲れ様でした」

と鍵を借りた事と試験をやってくれた意味も込めてそう言い彼女は着替える為に更衣室まで歩き始めていった。

そして彼女は気付かなかったが、心の何処かで学園生活を楽しもうと考えてしまっていた。

第一話 IS学園入学試験（後書き）

抹茶「はい、今回は此処までです」

フェリシア「ふう、山田先生は中々の強敵だったわ」

抹茶「そうですか、取り敢えず今回は単一仕様能力使わなかったんですね」

フェリシア「ええ、相手を貶している様だけども今は私は誰にもマクされたくないし注目もされたくないわ」

抹茶「なるほど。よほどの破壊に対する執念が有るんですね」

フェリシア「そうよ。私の両親を殺した機械は原型が判らないくらい壊してあげるわ」

抹茶「おっとそろそろフェリシアがネガティブゾーンに入りそうだからそろそろ後書き閉めるか」

抹茶・フェリシア「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれば直します

第二話 対面（前書き）

抹茶「はい、第二話完成しました！」

フェリシア「次話まで5日って結構掛かってるね？」

抹茶「そう言わないで下さい。今回何故かISのストーリーを書くのが何故か大変だったんですよ」

フェリシア「いやいや。それは貴方のせいでしょう？自分のストーリー構成の無さを棚に上げるのはカツコ悪いよ？」

抹茶「はい、申し訳有りません」

フェリシア「まあ、良いわ。さっさと本編入りましょう」

抹茶「ですね」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみ下さい！」

第二話 対面

「それじゃあ岡田 お前は教室の外で呼んだら入って来い」
と千冬先生に其れだけを告げられ先に教室へと入って行った。

（はあ、面倒ね。あれを探すためだけに学生に成らなくちゃいけないなんてね）
とフェリシア自体も一瞬選択を間違えたかと思ったが

「岡田入れ」と教室内から千冬先生に呼ばれフェリシアは観念したように渋々と教室に入って行った。

そして千冬先生から手でこっちに来いと促されたので教壇の横へと立つ。

「全員知っているように彼女が一日遅れて入学してきた岡田美空だ。岡田自己紹介しろ」

と千冬先生から其れだけを言われ

「先程織斑千冬先生からも言われたとおり私は岡田美空と言います。こうして男性の制服を着ているのは色々な訳がありますので深く追求してくれない方が助かります」とだけ述べておいた。

しかし運が良かったのかも知れない。早くも接触するべき対象・織斑一夏が同じクラスに居るのだから何とか猫を被っておけば接触するのは、簡単だろう。

（それにしてもさっきからクラスメイトが何も言っていないけど第一印象最悪かな？）

とフェリシアは一瞬心配してしまったが

「きゃ・・・」

「きゃ？」

「きゃあああああああー！！」

「女の子よ！それも凄く可愛い！」

「それに可愛いだけじゃなくてクールな所も有るのかな！？」

「男装も似合うなんてコスプレさせてみたい！」

「ああ、この学園に入れてよかったーお母さん今年の誕生日プレゼントト今度からちゃんと選ぶからね！」

と頼い位に新入生の存在に喜んでるようだった。これだったら速めに学校に怪しまれる事無く溶け込めるかもしれない。

「あー騒ぐな静かにしろ！」と千冬先生の一言でクラスメイト達による喧騒が消えていった。

「それでは岡田さん。貴方の席は、織斑君の左の席なのでどうぞ」と入学試験時に戦った山田先生に席を勧められる

「どうも・・・」とだけ山田先生に告げフェリシアは改めて席に着いた。

そして席に座ると同時に

「これから一年間宜しくな岡田さん」と一夏が話しかけてきた

流石のフェリシアも何も言わないのもマズイので

「此方こそ、宜しくお願いしますね」と微笑しつつも返事を返しておいた。

だが次の瞬間後ろから冷たい物を感じ後ろを唐突に振り返った。そうして一人の女子が此方を射抜くような目付きで睨みつけていた。

（全く私が何かしたかは知らないけど殺気までぶつけるのは辞めてくれないかな？）

とフェリシアは少々面倒さを感じつつも席を座りなおしたが

「人が喋ってる中勝手に立つとは良い度胸だな岡田」

と目の前に千冬先生が立っていたそして手には制裁棒ならぬ出席簿

「はあ、不幸ですね」とだけ呟き

パン！と大人しく叩かれた

「さて、岡田が来た事でようやくクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

と一時間目の授業をする事無くその事を決めようとしていた。

そしてフェリシアは此処は初めてなので正直に手を上げて聞きたい事が出来てしまった。

「すみません、クラス代表者はどんな事するんですか？」と率直に聞いておいた。

「主な仕事としては、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力を測るものだ。ちなみに一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで」と説明を受ける限り如何やら面倒くさそうだ。

だがフェリシアも今後の事を考えれば此处でIS学園での実力者の腕を確認しておきたいのだ。

（如何すれば良いと思うジ・エンド？）とパートナーにも一応確認を取っておく

（正直に言えばこのクラスでマスターと同等それ以上の実力者は見込めないでしょう。ただ不確定要素とすれば僕は織斑 一夏が存在が気に成りますね）

と如何やらジ・エンドも一夏存在が気に成るようだった。

そして此方から何かを言うまでも無く急に織斑一夏がクラス代表を指名されて嫌がっているようだが

「自薦じせん他薦たせん問わないと言った。他薦された物に拒否権など無い。選ばれた以上覚悟をしろ」と全く持って拒否権すら許さない最悪な事が起きていた。

「い、いやでも」と未だに反論しようとしていたが

「待つてください！納得いきませんわ！」

とイギリス代表のセシリア・オルコットがなにやら一夏が代表に成る事が嫌なようで騒ぎ始めた。

如何やら興奮しており、自分の力に酔ったように強く、熱く、いか

に自分がクラス代表に相応しいか喋っているが

正直に言えばフェリシアもセシリアには興味がそこまで無くセシリアに全く顔を向けずに話を無視しようとしていたのだが

「良いですか！？クラス代表は実力トップの人間が成るべき、それは私ですわ！……って私の話を聞いているんですか岡田美空さん！」と厄介事に巻き込まれる気は無かったのだが怒りの矛先が此方に向いてきた。

「全く五月蠅いですね。クラス代表に成りたければ勝手にどうぞ。私は貴方のふざけた演説聞く位なら寝てた方が数倍マシです」と片目だけセシリアに向けそう言い放った。

「なっ、なっ！？私を侮辱しますの！？」と青筋を立てて怒っているようだった。

「何を言っているんですか？言い掛かりは止して下さい貴方が勝手に怒っただけでしょう？！」

「決闘ですわ！」

「弾代節約しないといけないのでお断りします」

と何故か此方は悪くないはずなのにクラス代表決定戦に自分も強制的に入れられ3日後の第3アリーナで行われる事になってしまった。

(ジ・エンド 正直に言っただけで面倒だから私が寝てる間にあの五月蠅い人倒す方法画策してね)

(了解しましたマスター あの阿呆にほぼダメージを受けずに勝つ

方法を組み上げて置きます)
と面倒くさがりつつも決闘自体は真面目にやるつもりで居たフェリシアだった。

そして授業が終わり。その日の夜少し遅めの食事を採ってIS学園内に用意された寮内をゆっくり歩きながら自室へと向かっている所だったのだが何故か一箇所にだけ女子が集まる所があったので其処を細目で覗き込んだ。

そこには、多数の女子に囲まれてあたふたしていた織斑一夏が居た。正直に言えば此れだけ露出の多い女子が多く入れれば流石の男子と言えど目の毒だろう。

そしてフェリシアの進行方向も織斑一夏が居る場所を通って行かなければ成らないので人ごみを押し通りながら円形の真ん中まで通りそのまま一夏を無視してそのまま部屋に行こうとしたのだが

「待つて岡田さん。お願いします。匿って下さい。このままじゃ確実に悪い事が起きそうなんで」と長袖の裾を掴んで此方を呼び止めていた。

正直に言えばフェリシアもこの状況で余り関りたくもなかったのだが

(此処でちょっとした恩を売っておきますか…そしたら此方の行動

に怪しまれる事はない)
と今後の事を考えて助ける事にした。

「はあ…仕方有りませんね。じゃあとつとと着いて来て下さい。部屋まで案内しますので」

そう言つて一夏の腕を掴み体を起こした後再びフェリシアと一夏は1234号室へと歩き始めた。

そして部屋に入れたあと中を覗かれるのは正直気味が悪いので部屋に鍵を閉め、冷蔵庫からペットボトルのウーロン茶2本を取り出して一夏に一本渡した。

「ありがとう」

「いえいえ、お構いなく」と告げて自分のウーロン茶に口をつけ始めた。

そして有る程度休憩が終了した所で部屋の隅に積まれていたダンボールの一つを開け始め汚れた布・オイル挿しそして使い慣れているデザートイーグルを取り出し始めた。

流石の織斑も横目で確認はするが多少の驚いているようだった。

「岡田さん。それは何ですか？」と何故か撃たれるのが心配なのか敬語になっていた

思わず「何で敬語になつてるんですか？解体するんですから弾は入ってませんよ」

と安心させる一言を言っておいたのだが一夏は銃に興味があるのか解体している最中は此方の手元をじっくり眺めていた。

「……そういえば岡田さんは、あのセシリアって奴には」

「負けませんが如何かしましたか？」

「えっ？」

「勝とうと思えば勝てますが、私が学園にきたのには大きな理由があるんですよ。それでこんな所でクラス代表に何か遣ってたら自由に学園内を動くことすら出来ません」

「大きな理由？それって聞いても大丈夫な物か？」と如何やら気になるようだった

「復讐ですよ」と冷やかな声でそう告げた。当然一夏の方も驚きを隠せないようだったが

「なーんてね。驚きましたか織斑さん？冗談ですよ冗談。第一この学校に来たのにはISの勉強が出来るから来ただけですよ」と手を振りながら笑ってしまった

「だよなあ。全く一瞬岡田さんが本気でそんな事考えてるのかと思っちゃったよ」

と一夏も冗談として受け止めていたようだった。

「全く織斑さんはこんなにもか弱い私が暴力事が好きだと思ってるんですか？」

とデザートイーグルの修理を完了させ腰に両手を置いて頬を少し膨らませて軽く怒っているふりをした。

「いや、さつき銃を弄つてたからそれも無くは無いかなんて思ったんだけど…それより一々苗字だと千冬姉と区別付かないから一夏で良いぞ?」

「いえ、良いです。私はこの呼び方で良いです。……余り深く関ると情が写るかもしれないんで」

と最後まで一夏に聞こえないように小さな声で呟っていた。

「そっか…なあ、俺 岡田さんの事好きに呼んで良いか?」

「変な名前で呼ばなければどうぞ自由に呼んで下さい」

「そっか此れから宜しくな美空」とイキナリ苗字をすっ飛ばして名前前で呼んできた

「ッ!?!」

流石のフェリシアも偽名とは言えイキナリ名前を呼んでくるのには少々動揺をしてしまった。此方の予想ではせいぜい『さん』付けを辞めると思っていたのだが予想より斜め上に行き過ぎていた。

「そっといえば美空は授業内容理解してるのか?」と唐突に聞いてきたので

「ええ、まあ一応ですが。それが如何かしたんですか?」

「いや、理解してるなら勉強を教えて貰おうと思っただけ」

「山田先生に聞けば良いでしょう?」

「其処を何とか頼むよ」と此方を拝むように頭を下げてきた。

「はあ、仕方有りませんね。それじゃあ机に座ってください判らない所を重点的に教えますんで」
と言ってノートをバックから取り出し机に出した。

フェリシアも正直に言えば此処で断つて一夏の部屋に戻しておけば良かった筈だろうが、今回は何故か追い出す気には成らなかった。

（昔は私も良く教えられる事が有ったからツイツイ他人にも教えなくなっちゃうのかな？）

とフェリシアは少しだけ顔に微笑みを受かべながらそう思った

だが一瞬頭痛を感じ頭を押さえながら机から離れ

（教えられる？…誰に？）

と疑問が起きてしまった。其れも其の筈だろうフェリシアが元々育った所は、近くに学校が無く殆どの知識は両親または独学で学ぶ事しかなかったのだ。

そう思うとフェリシアは両親以外で誰かが教えてくれた記憶等無い筈なのに何故先程の言葉が思い浮かんだのか謎な状態だったが

「なあ美空。此処はどうなってるんだ？」と一夏声を掛けられハツとし

直ぐに問題を見て

「織斑さんもう少し自分で考えることをして下さい。此処は少しややこしいですけど……」

と先程の事を頭から綺麗すっぱり消して教える事を続けた。

だが其れは長く続かず…ドコンツ！という音とともに扉をぶち破ってポニーテールの女子が突入してきた。

「第！？」と一夏驚きながらも椅子から立ち上がった

「さっきの事は許してやる。だから帰って来い」と此方を睨みつけながら喋っていた

「いや、でも俺美空にべ「私の事は気にしなくて良いですよ？きっと私より篠ノ乃さんの方が勉強教えるの上手い筈ですから。それに眠いのでそろそろ帰ってください」…判った」
と一夏が観念したように勉強道具を仕舞っている時に

「そついえば美空のノートちよつと借りても良いか？」
とノートをひらひらと揺らしながら聞いてくる

「ええ、どうぞ。ただ明日には、また授業が有るので返してくださいね」

と言って一夏は篠ノ乃に引つ張られながら帰っていくが一瞬だけ篠ノ乃が此方に一睨みしてきた。

そして部屋に残ったのは壊された扉とフェリシアだけだった。だが彼女には仕事がまだ一つ残っていた。

「はあ、織斑先生に修理の要請しとかなきゃ」
と言いながら扉を一時的にドアに立てかけて廊下を歩き始めた

第二話 対面（後書き）

抹茶「はい、第二話は此処までにさせていただきます」

フェリシア「今回は織斑一夏との合流が話の目的だったんだね」

抹茶「はい、そうなりますね。今回のつきまとう相手を見つけたと言う事でタイトルも対面にしてみました」

フェリシア「ねえ、作者は結構タイトル考えるの下手じゃない？」

抹茶「はい、全く持ってその通りです。でもたまにはタイトルを考えるのもありかと思ひまして」

フェリシア「そう、そう言えば今回早くも頭痛が起きてたけど何なのあれ？」

抹茶「ああ、其れに付いては秘密です。話を進めて行く事によって貴方の真実も判っていくとだけ述べておきましょう」

フェリシア「そう、気に成るわね。…さて後書きも此処らへんで切る？」

抹茶「そうですね。そうしましょうか」

抹茶・フェリシア「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

あと誤字脱字などもありましたら注意してくれれば直します

第三話 訓練（前書き）

抹茶「はい、此方も3話目完成です!」

フェリシア「少し遅くないかしら作者?」

抹茶「気のせいじゃないんですかね?」

フェリシア「いいえ、そんな筈は無いわ。第2話から既に1か月は立ってるのよ?」

抹茶「はい、そうですね。すみません実はいうところこのネタや話が全然思いつかないんです」

フェリシア「それは作者がへボだから書けないだけでしょう?」

抹茶「そう言わないでください辛くなるんで」

フェリシア「ふん!まあ良いわ。次からは頑張りなさい」

抹茶「まだ弁明の余地をくださるんですね。ありがとうございます」

フェリシア「ありがとうございますと次話書きなさいよ」

抹茶「そうですね。それじゃ何時ものやって前書き閉めますか」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみ下さい!」

第三話 訓練

「で・・・何で私の所に来ているんですか？」
とフェリシアは昼食をとりながら目の前の人物に聞いた。

「いや、千冬姉から聞いた話なんだけど美空も専用気持ちって聞いたからさ」

この時フェリシアは千冬先生に（何て事をしてくれたんですか、あの人は）と声も出さず思ってしまった

「確かに織斑さんの言うとおり私も専用機持ちではありますけどそんなの関係ありません。私も数日後に控えている決闘に対して準備しなければいけないのでお断りします。それにISだったら篠ノ乃さんに頼って下さいよ」

と先ほどから此方を睨み付けていた篠ノ乃に役目を押し付けトレーを下げに行った

だが食器を出している最中に後ろから

「仲が良いんだな」「?」そりゃ友達だから当然だろ」

と話声が聞こえてきたがフェリシアはそんな会話にも全く気にする事無く食堂を出て行った

放課後フェリシアは取敢えずアリーナの使用許可書を出すために事務室へと向かおうと歩いていたら

「自分でも呆れるほどに道に迷っちゃいましたね」と愚痴を零しながら勘で歩いていた所

パシーンと何かで打ち合っている音が響いた。思わずフェリシアも音の鳴った方向に体を向けると多くの人だかりができていた

（あれを見るからに騒ぎの中心にはきつと織斑さんが居るんでしょうね…ジ・エンド確認してみてくださいる？）

（了解ですマスター………予想通り中心に男性の反応がありますね。どうしますかマスター？）

（当然様子を見るに決まっています）

とジ・エンドと会話している間にもフェリシアは人混みを掻き分けて中心部まで顔を出したがすぐさま周りの迷惑も考えずに足に力を入れ走り出した。

そこには体勢を崩し掛けて上手く反応出来ずにいる織斑に対して面を放とうとしている篠ノ乃が居た。

当然そのまま素手で受けるのは怪我の原因にも成りえるので右手だけを部分展開し竹刀を受け止め溜息を吐きだしてしまった。

「確か岡田だったか…何故一夏との訓練を邪魔するんだ？」

とまったく理由をわからずにただ此方を睨み付けて来ていた。

「訓練…訓練ですか面白いこと言いますね貴方も」

とフェリシアは篠ノ乃の言葉に笑いを隠せていなかった。

「何が可笑しいんだ！馬鹿にしているのか！」と突っ掛ってくるが
「馬鹿にした覚えはないんですけどね。：篠ノ乃さん先ほどの面の
威力判って無かったんですか？先ほどの面がもし当たってたら骨折
してたかもしれませんよ？これじゃあ訓練というよりも一方的な暴
力ですね」と右手を竹刀から外しそう言い放った。

「そ…その時は一夏が軟弱だから」と篠ノ乃も弁明しようとしてい
たが

「関係ありません。第一防具を着けて無い人を叩くってどんな精神
しているんですか？あと一つ忠告を言わせてもらえればその力に対
して歯止めを掛けないと何時か誰かを傷つけますよ
と正しいことを言ったはずなのだが

「言いたい事を言っておいてそんなに私の遣り方が気に食わないな
ら決闘をしる！」
と竹刀の剣先を此方に向けてきたが

「嫌ですよ。何で私があなたの得意な競技でやらなきゃダメなん
ですか？」

そう言っただけで帰ろうと出口に向かって歩こうとしたが

「屁理屈を…そんなにも私と戦うのが怖いのか臆病者」

「おい、箒幾らなん「判りました馬鹿にされてすごすご引き下がる
ほど私も優しくありませんからね？」と言いきり歩くと向きを竹刀の方へ
と向け竹刀を選び始めた。

そしてお互いに防具を着けフェリシアは竹刀の小刀・長刀を持った二刀流一方の箒は一本の竹刀で中段の構えをしていた。

「私はルールを知らないのですが、如何なっても知りませんからね」とだけ告げ

審判を務めている織斑の「はじめ！」と声と同時にパン！パーン！という音が鳴り響き勝負に決着がついた。

周りの眺めていたギャラリーも一夏も箒も何が起きたのか理解出来ていなかったが確かにフェリシアの小刀は箒の竹刀を受け止めそのままから空きだった頭部に高速で竹刀を叩きつけていた。

「……貴方の敗因は二つです。一つ目は私が此れが初めてだから甘く見ていたところ二つ目は先程の事で腹が立って冷静に判断できず速攻で勝負を決めようとしていた所ですよ」と言いつつも防具を既に外し竹刀を元に戻していた。

「そうそう昼休みの件ですが何度来ても同じです。私は貴方には教える気はないんで引き続き篠ノ乃さんに訓練を頼んでください」とだけ一夏に告げフェリシアは道場を離れ再び事務室へと向かい歩き始めた。

そして彼女が事務室に着いて居た時には既に夕暮れだったが彼女は其れすらも構わずに再び事務で手に入れた地図を眺めながらアリーナへと向かい始めた。

幸い夕暮れ時だったお蔭かアリーナには人っ子一人居らずフェリシアはホツとしながら更衣室へと向かいISスーツに着替えジ・エンドを展開した。

(今回も1対1の訓練で良いですかマスター?)
とアリーナの中心部を漂っている最中にそう聞いてきた。

(ええ、それで構わないわ: 単一能力起動)

(了解、単一能力『九つの悪夢』NO1まで起動)

そうフェリシアとジ・エンドが思った瞬間フェリシアの背中に装着している棺桶の一つがチエーンから外れ自分の目の前に出現し、そしてバンツ!と言う棺桶の扉が蹴られる音と同時に目の前にもう一人の自分が存在していた。

(これを使うのは久々ですねマスター)

(そうね。最近は訓練すらも真面に出来て無かったから実の有る訓練をしましょうね。取敢えず武装は全部使用可。勝敗はどちらかが負けを認めた時点で終了で良い?)

(ハイ、しかし今回こそは僕が勝たせてもらいますよマスター)

そう言っただけはバックステップで此方との距離を広げ右手にクリムゾンナイフ左手にコンバットナイフを展開していた。

しかし何故ジ・エンドが先ほど勝たせて貰うと言う事に疑問を持つかも知れないが『九つの悪夢』によって呼び出されている分身は殆

どが、ジ・エンドが動かしているのだ。当然ジ・エンドでなくてもフェリシアやA Iによって動かせるがフェリシアの場合は忙しく遠隔操作になりがちなのでその間無防備になる危険性ある故殆ど使わないのだ。またA Iの場合だとパターン化する危険性があるのでジ・エンドが動かせる時はジ・エンドがその分身の動きを担当しているのだ。

そして分身を操るジ・エンドに応えるようにフェリシア両手に使い慣れたデザートイーグルを二丁出しその銃口を分身へと向けた

そして緊張の中本体が軽く息をのんだ瞬間フェリシアと分身はすぐさま動き出した。分身は格闘戦主体で戦うつもりなのか瞬時加速をして距離を詰めてくるがフェリシアはそれを読んでいたように敢えて後ろには下がらずに分身の居る前方に向かって瞬時加速を行った。

だがその程度で動揺するほど分身も弱くはないので、すぐさまコンバットナイフの切っ先を頭部に向けて振りおろし、クリムゾンナイフで棺桶を固定しているチェーンを切り裂こうと右から振りかぶってくるが、フェリシアは焦らずにすぐさま二丁のデザートイーグルを分身の右腕と左腕に撃ち込んだ。

当然振り下している最中であるのでその行動に止める事は出来ず銃弾は腕を貫通しナイフを落とすまでには至らなかったが攻撃は中断してしまった。

そして分身は追撃を恐れ後方へと瞬時加速で下がろうとしていたが既に時は遅くフェリシアは腕に展開していたハーケンで体を絡み取っており瞬時加速で開けた距離は一瞬で距離無くなり左手で首を掴まれ右手のデザートイーグルの銃口を頭に押し付けられていた。

（やっぱり1対1より2対1の方が良かったんじゃないんですか？
マスターの発想は僕の予想を覆す物ばかりですから正直言って一人
じゃ勝ち目有りませんよ）とジ・エンドは泣き言を言っていた

（私が教科書通りの戦いをすると思ってるんですか？私は誰もが遣
らないような行動するんだからもう少し頑張ってね）

（知りませんよ！取敢えず次からは2対1で戦わせてもらいますか
らね！）

とどうやら呆気なく自分が負けて居る事にジ・エンドも悔しさが隠
せないのか何故か2対1になってしまった

だがフェリシアは

（こんなにも殺し合いから離れて生きていくのは数日限りとは言え
は懐かしいな）

と思いつつ先生が来るまでずっと訓練を続けていた

第三話 訓練（後書き）

フェリシア「幾らなんでも少なすぎないかしら作者？」

抹茶「ごめんなさい。もう既に弁明の余地すらないと自分には無いと見えてきた」

フェリシア「判ってるじゃない。でも此処で殺したら次話が書けなくなるから生かしておいてあげる」

抹茶「ありがとうございます。さっさと次話書き始めないとな」

フェリシア「それよりも感想来てたらしいわね？」

抹茶「ええ、yuusan Raystingerさん有難う御座いました」

フェリシア「さて、後書きもこんなもんですかね？」

抹茶「そうですね。それじゃあ閉めますか」

抹茶・フェリシア「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれば直します

第四話 クラス代表決定戦（上）（前書き）

抹茶「さて此方も仕上がったね」

フェリシア「何処がかしら？これが上って事は、まだ続くんじゃないの？」

抹茶「そうですね。今回はフェリシア対セシリアです」

フェリシア「そう、せいぜい私を楽しませて欲しい物ですね」

抹茶「わお、流石 バトルジャンキー 戦闘狂考える事が物騒だな」

フェリシア「仕方ないでしょ。今まで傭兵時代で多くの敵と戦ったんだから楽しみも覚えるんですよ」

抹茶「うう、その矛先を此方に向けないようお願いよ」

フェリシア「考えといてあげるわ。さてそろそろ本編入りしましょうか」

抹茶「ですね」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみ下さい！」

第四話 クラス代表決定戦（上）

決闘当日フェリシアは一人更衣室の中でISスーツを着たまま待機していた。

既に外には噂の男の新入生を見る為に多くのギャラリーが観戦席に座り込み今か今かと待っていた。

そしてセシリアも織斑と戦うためにアリーナ内に入りISを展開して待機しているのだが

「遅いですね……決闘する時間から優に10分は経ってる。織斑君に限って逃げ出すと言う事はあり得ないですが幾らなんでも」

とフェリシアは織斑が何時まで経っても出てこないのでもう呟いてしまった。

そして何で遅れているのかその理由を考えている最中に唐突に更衣室の扉が開く音が聞こえた。そしてフェリシアも誰が入ってきたのかと確認を取ってみると其処にはスーツが良く似合う狼のような目つきをしていた織斑千冬先生が立っていた。

「岡田 織斑の方が、まだアイツ専用のISが運送途中でまだ来ていない。だから一回戦は織斑の方を後回しにしてお前とセシリアの対決を行ってもらおう」

とフェリシアもある程度予想していたことを言われ

「判りました。……さっさと終わらせますかね」

と言いながらさっきまで穏やかな目を獲物を狩る目つきに変えながらジ・エンドを展開していった

そして完全に展開が終わりアリーナへと繋がる入り口に向かって歩き始めていた所

「穏やかに過ごしたいなら余りやりすぎるなよ？」

と千冬先生から忠告を言われたがフェリシアはその事を無視しながらアリーナ内へと入りこんだ。

だが観客席にいるメンバーの大半の目当てが織斑で有って其処まで興味のないフェリシアが入った瞬間

「あれが岡田さんの専用機？」 「候補生じゃないのに専用機持ち？
…あれを奪えば私も織斑君と」

「全身装甲なうえに棺桶と変わった兜：気味が悪い」「さつさと負けて織斑君に変わればいいのに」等々

人が長い間一緒に戦ってきたISを馬鹿にした上に盗もつと考える奴も居るので多少の苛立ちを覚えたがジ・エンドが気を使ってくれたのか何時の間にか観客席からの声はシャットダウンされていた。そしてジ・エンドをセシリアに向けてと

「逃げずにちゃんと来ましたのね」

と言いながらふふんと鼻を鳴らしセシリアが腰に手を当てポーズをしていた。

だがフェリシアは、そんな事などを聞く気もなく

「最後のちゃ」「さつさと始めませんか？私は貴方のような雑魚に構って居られるほど暇じゃないんですよ」

とフェリシアは面倒臭がりながらもそう言った

「そうですね、せっかくチャンスを差し上げようと思ったんですけどね！」

と言いながらスターライトブレイカーMK-?を放つが

フェリシアは避ける気はなく、背中に装備していた棺桶を自分の前方へと回しセシリアの放ったビームを受け止めていた。

そしてそれが開戦の合図となったのかすぐさまフェリシアはセシリアのいる方に向けて走り出した。

だが此方に近づける気はないのか

「そう簡単に近づけると思ったのですか？ブルーディアーズ！」
と言って腰に装備されているビットが展開して此方にその銃口を向けたが

「貴方の方こそ余裕かましてる暇が何時までもあると思ってるんですか？」

と何時の間にか展開していた左肩のミサイルポッドから4発のミサイルを射出していた

だが「たかだか4発ぐらい！」

と撃ち落とそうとブルーディアーズを動かしてビームを放とうとしていたが直ぐにパカッと気の抜けた音と共に中から8発のミサイルが飛び出していた。そしてディアーズ遅れてビームを撃つた時にはその役目を果たし何にも入ってないただの鉄くずを貫いていた。

そして分裂したミサイルをすぐさま落とそうとセシリアは必死にデ

イアーズを動かしているが

(マスター相手ってアホなんですかね？ビット動かすのに必死で自分が動いてないのに気付いてないですよ？)とジ・エンドも敵の間抜けさに呆れていた。

(さあ？…しかし代表候補性って言ってもこの程度の物なんですかね？)

と一瞬だけ考えたがすぐさまその考えを打ち消しておいた。

そしてフェリシアもその隙を見逃すことはなくすぐさまTAR-21・P90を展開しセシリアが乗っているブルー・ディアーズに向けて連射した。

当然ビットを動かすのに集中して居た為

「えっ？キヤア！」とセシリアは可愛らしい悲鳴を上げているが

これによって先ほどまでセシリアが操っていたビットはセシリア自身が集まらなくなった為その動きを止め辛うじて残った11発の小型ミサイルは銃弾によって少々の怯みを起こしたセシリアへの追撃を開始していた。

当然セシリアも対応しようとするが、ブルー・ディアーズは中距離専用ISなので目先にあるミサイルに対応し切れる事もなく直撃し爆風が晴れた時には右腕・スカート部・左足の装甲はボロボロに成っていた

「クッ、よくもやってくれましたわね」

とまだ何か言っているようだが

フェリシアは相手の話を聞く気など全く無く先ほどまで展開していたミサイルポッド・TAR-21・P90を収納し新たに小型陽電子砲・コンバットナイフ・スラッシュハーケンを展開しセシリアに向けて瞬時加速を行った。

だが流石は代表候補せいなのか、此方の武装を見てすぐさまセシリアも瞬時加速を行って距離を離してスターライトブレイカーMK-?を構えて此方を撃とうと銃口を向けようとするが

「遅いですよ」と告げ

ハーケンを射出しスターライトブレイカーMK-?の砲塔に巻きつけ一気にワイヤーを巻いた事によってセシリアの手からスターライトブレイカーMK-?を引き寄せ使い物にならないようコンバットナイフをエネルギー装填場所に突き刺しそのままコンバットナイフごと地面へと投げ捨てた。

「はあ、所詮代表候補生と言ってもこの程度ですか正直がっかりですね」

そうフェリシアは言いながら相手の弱さに落胆を隠せなかった。

「なっ！貴方本気で私を怒らせたいんですか？」

と流石に馬鹿にされたのに力チンと来たのか青筋を立てながら聞いてくる。

「別に貴方が怒ってもこの状況は覆せないでしょう？…全く最初は代表候補生だから少しは、やるかと思つてクラス代表戦も負ける気でいましたけど、興が覚めました。一気に勝敗を決めましょうか」と言つて軽い殺意をセシリアにだけ向け放った。

「せいぜい頑張って逃げ回って下さいね？」
とそう告げた後両手にビームサーベルを展開し瞬時加速で一気に距離を詰め始めた

「うあ…ディ ディアーズ！」
と殺気に当てられて軽く恐怖を覚えたのだろうセシリアは焦りながらディアーズを操作してビーム砲を放つが

「そんな軽い攻撃で私の盾を貫けると思ってるんですか？」
と言って瞬時加速中にも関わらず再び棺桶を攻撃される場所に動かし完全に攻撃を無効化した

そしてセシリアはフェリシアの殺気に包まれた状態で動くことも攻撃する事も出来ずただ無慈悲に振り下される二本のサーベルの直撃を受けた事によってISの『絶対防御』が働きセシリアのシールドエネルギーを削り取り

勝者 岡田 美空 と言う声だけが流れた

正直ギャラリーは、この結果は予想はつかずただ茫然としていたがフェリシアはただ一人「つまりませんね」とだけ呟き待機室へと戻って行った

第四話 クラス代表決定戦（上）（後書き）

フェリシア「がっかりね。所詮代表候補性と言ってもこの程度だったなんてね」

抹茶「いや、あなた自分の実力判ってる？今まで戦場で何度も戦ってるのと温室でぬくぬくと育ちながら練習している相手じゃどちらが強いか誰から見てもわかると思うぞ？」

フェリシア「そうはいつでもね。代表候補生も軍隊と同等の訓練を受けておいてあの程度なら正直訓練にも成らないですよ」

抹茶「そうですね、まあセシリアファンには申し訳無い事しましたね。すいませんでした」

フェリシア「何で貴方が謝るのかは謎だけど、今回も感想来てたらしいですね？」

抹茶「ああ、はい。感想というよりもご指摘ですね。ミナライさんご指摘有難う御座いました」

フェリシア「さて後書きもそろそろ閉めましょうか？」

フェリシア・抹茶「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれば直します

第五話 クラス代表決定戦（下）（前書き）

抹茶「はい、第五話完成しました」

フェリシア「だから時間が掛かり過ぎだと何度言えば」

抹茶「もう、勘弁してください。これホント不定期更新ですけど。それでも1週間以内に書こうとは思ってるんです」

フェリシア「そう、まあ良いわ。それよりも要約終わるんですよ代表戦？」

抹茶「ええ、ただ自分で書いててクラスメイトに対して腹が立ちます」

フェリシア「？如何言う事？」

抹茶「それは読んでからのお楽しみで」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみください！」

第五話 クラス代表決定戦（下）

フェリシアは、一回戦を終わらせジ・エンドを収納した後予め休憩室に用意していたスポーツ飲料に口に着けながら更衣室へと入った。てつきり誰もいないと思ったフェリシアだったが其処には先ほどの一回戦が行われる前から居た千冬先生が立っていた。

「全くお前は学園を平穩に過ごしたいならと教えておいたがあれじや逆に目立つぞ？」

と呆れながら言ってきた

「そうは、言いますけどあの程度の実力じゃ逆に負けると言う方が難しいですよ。ハッキリ言って実力の2割程度しか出してないのにあれで本気と勘違いしてる時点で雑魚ですね」

と言いながら持っていたペットボトルを床に置きそう言い放った。

そうフェリシアは、先ほどの戦闘は、殆ど手を抜いていたのだ。確かに最後には殺気をぶつけてセシリアを恐怖心から動けなくしたのだが、実はあれも極力抑えていたのだ。仮にあの場で全力で殺気を会場にぶつけていたら耐性の無い人間はショック死させる危険性が有ったので控えていたのだ。

また力を余り見せない理由は、クラス対抗戦にまで出てジ・エンドの能力を晒したくなかったのだ。フェリシアは何処の国にも属さない傭兵な上にジ・エンドの能力を知った途端に各国がその力を軍事に加えたい上に此方の容態等関係なく扱き使うのが目に見えるので余り大きな力を見せない様に手を抜いているのだ。

「全く手厳しいな。だが井戸の中の蛙は大海を知る事は出来たか…」

そう千冬先生が呟いていたが

フェリシアはその言葉の意味が判らず首を傾げていたが急に更衣室の扉が開き山田先生が入ってきた。

そして千冬先生に近づき一言二言話すと千冬先生は頷き

「岡田 私は、織斑に会いに行ってくる。どうやらアイツの専用のISが漸く来たらしい」
と言いながら織斑先生が出口に向かって歩き始めた

「そうですか…じゃあ先に入って待つときますね」
と言いながらアリーナに続く入り口に向かって歩き始めた

そして入って直ぐに感じた目はさっきのような侮蔑のような物では無く、代表候補生を殆ど無傷で倒した事に対する畏怖を感じていた目だった。

その事にフェリシアは

（先ほどは此方を侮辱していたのに次は恐怖ですか全くこの学園には呆れますね）

と心の中で呆れ返ってきたが

次の瞬間白のISが入り直ぐに敵を撃つ為に集中し始めた。

「よろしくな美空」と言ってくるが

「よろしくお願ひします。……それよりも武装を展開しないのですか？」

そう言っただけでセシリアの時のように武器を展開して無いので不審に思ったが

「いや、それがさ武器が一つしかないんだ」
そう言っただけで近接ブレードを展開してきた。

一瞬フェリシアも相手の武器が一つしかないことに疑問を覚えたが、直ぐに千冬先生の姿を思い浮かべた。嘗てのモンド・グロツソの大会を千冬先生は近接ブレード一本で優勝したのだ。

そう考えると一夏にもその才能が有るのでは？と錯覚を起こしそうだったが直ぐにその考えを払い自分の片手に深紅のクレイモアを展開させた。

「さあ、始めましょう。貴方にも見せてあげますよ終焉フィナルの名を持つISの力を」

そう呟きフェリシアは片腕でクレイモアを持ちながら瞬時加速で一気に一夏との距離を詰めクレイモアを大きく振り下した。だが見え見えの攻撃など当たる筈も無く直ぐに後方に下がられ中段打突を放ってきたが直ぐに体を捻らせ半身にし刀を擦れ擦れで避けた。

だが此れが狙いなのか一夏の口が少し歪んだ。

一瞬何が来るのかと思ったが刀を軌道を無理やり横に倒し薙ぎ払おうとしていたがフェリシアもワザと受ける気もなく片手に持っていたクレイモアを上に向かって振り上げた。それによってクレイモアを振り上げた時の軌道上に有った刀は上に大きく上がりその隙を見逃さずクレイモアを床に突き刺し支柱として扱い一夏の腹に思いっきり蹴りを入れた。

「ガハッ！」と言って腹を押さえて痛みを耐えていたが

「これでラストです！」

と痛がつている一夏などお構いなしと言うように前蹴りを放った左足を床に叩きつけ右手に持っていたクレイモアを一夏に向かって回転させながら投げつけた

「なっ！？ウソだろ、クレイモアを投げるなんて！」

と言いながらも飛んできたクレイモアを左方向に瞬時加速し避けきった後此方に向かって再び瞬時加速をしてきて一気に距離を詰めて

「うおおおお！」と叫びながら下段から上段への袈裟切りを放とうとしていたが

「一気に距離を詰めてくるのは驚きですけど…それでも遅いんですよ」

と言いながら既に展開しきつてるハルバートを両手で柄を掴み渾身の袈裟切りを防御していた。

だがフェリシアは防御をする為だけにハルバートを展開した自分の考察の甘さに舌打ちをしてしまった。そして直ぐにバックステップをしハルバートで自分の前面へと右から左へと薙ぎ払った。すぐに一夏も刀を寝かせてハルバートを刃先をずらし回避してホッとしていたが

「この程度をガードできて嬉しがるのはダメですよ？」

と言いながら右手で薙ぎ払っていたハルバートを突然手放し左手で再び薙ぎ払った。

直ぐに防御に移ろうとしていたが一本しかない刀は右方向に出てお

りガードは出来ず既にハルバートの刃は近付いているので回避しきれず壁まで一気に叩きつけられていた。

「やはり私の思い過ごしでしたか…」

と呟きながら追撃の為に右肩に展開したグレネードランチャーを連射した。

直ぐに一夏は爆炎と爆風に包まれたが勝敗を知らせるブザーが鳴らないことに不審に思ったフェリシアは一瞬疑問に思ったが、次の瞬間嫌な予感がし後方へと瞬時加速をし一気にその場から離れた。

だがフェリシアの嫌な予感は別な事で当たっていた。

どンドン払われていく黒い煙からは一夏のISが光の粒子にはじけて消え、再び形を成していた。

「やはり初期設定で戦っていましたか」

と言いながら舌打ちをして新しくなった白をフェリシアは睨み付けていた

だが一夏は此方に攻撃を仕掛ける前に

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」と言い始めていた。

一瞬何を言い出しているのだとフェリシアは不審に思ったが

「俺も、俺の家族を守る」

と言った瞬間フェリシアは苛立ちを覚えハルバートを収納し使い慣れたクリムゾンナイフとコンバットナイフを展開させ

「何も出来やしなくせに守るなんて言葉を使わないで下さいよ」と呟きながら齒を食いしばり一夏に向かって身を低くして突っ込み最小限の動きで右手のクリムゾンナイフを右下から左上へと袈裟切りを放とうとした。だが一夏はクリムゾンナイフを防ぐように刀を斜めにし、防ごうとしたがフェリシアは刃が接触する手前で動きを止めがら空きの横っ腹にハンマーグリップにしていたコンバットナイフで思いつきり突き刺した。これによって痛みによって顔をゆがめた一夏は一瞬刀の位置を動かしたためクリムゾンナイフを遮る物は無くなり連続して腹に切り付けた。だがこの程度で喜ぶ前に反撃から逃れるため瞬時加速で後方に下がったが如何やら必要が無かったようだった。

普段は、この程度なら直ぐに反撃に移ってくる敵が多かったのだが流石に一度も戦闘成れしていない人に斬撃の痛みは効くのか片膝を着き何も持っていない左腕を腹に回し痛みを堪えていた。だがその眼は未だに勝てない敵に対して諦めない意思を持っていた。

その眼に対し

「何で諦めないんですかっ」そう言いながらナイフを握る手が強くなっていた

「諦めきれないからに…決まってるからだろ！…俺が負けたら千冬姉の名にも泥を着けるだろうが！」
と完全に戦意を取り戻した目を此方に向けていた。

「そうですか…じゃあ誇って下さい。貴方に免じて私も本気を出しますよ」

そう言うで一夏は本気を出させた事に喜んだのか剣道で言う中段に構えた。

そしてフェリシアと一夏は同時に瞬時加速をし

「うおおおお」「はああああ」

とお互いに叫びながら一夏は中段打突の攻撃フェリシアはクリムゾンナイフとコンバットナイフによる上下からの攻撃を食らわせ様とした時

一瞬だが一夏の刀が光ったのが見えたが直ぐに消えていた。

そしてその後直ぐに決着を告げるブザーが鳴り響いた。

試合終了。勝者 岡田美空

そして一夏もフェリシアも『何故?』と言う顔をしていたが

一瞬にしてフェリシアも何が起きたか理解し

「エネルギー消費攻撃ですか…もし当たっていたら」

と一人吹き武器を収納して踵を返して更衣室へと戻って行った。

(マスター あのISの調査が終わりました)

と更衣室へと言った瞬間ジ・エンドがそういつてきた

(そう、それで結果はどうでした?)

(正直重度のロックが掛かってたので判った情報は二つだけです)

(構わないわ。あの天災が作ったISから情報を抜き取れるだけ上等だわ)

(はい、ありがとうございます。…あのISのNOは001番でした。名前は白式だそうです)

そう聞くとフェリシアは一瞬固まっていた。そうNO001番は白騎士のコアでも有る筈しかし何故こんな所にあるのか多少疑問に成ったが

(まあ、あれが001番のコアを使ったISだからと言っても操縦者があれでは脅威では無いですね)

と思いつつ再び着替えを再開し、この後行われるセシリアVS一夏の対戦を見る気も無く部屋へと戻って行った。

だが夜久々にフレグランス・キャンドルに火を着けて香りを楽しみながら戦闘で高ぶっていた精神を落ちつけていた所コンコンというドアノックが聞こえフェリシアは面倒臭がりながらもドアを開けて目の前の人物を見つめた。

其処に居たのは織斑一夏だった。直ぐに何の用かと思ったが客人を外で待たせるのも悪いのでフェリシアは扉を開けて部屋の中へと引き入れた。

「それで何の用ですか？」
と聞いておいた。

だがフェリシアは、前回起きた面倒事を避ける為に早めに用件を済ませて帰らそうとしたが

「俺にISの訓練をしてほしい」と頼んできた

一瞬フェリシアも何を言ってるか判らず。ただ「は？」と言っしかなかったが

「何でよりによって私なんですか？貴方には織斑先生が居るでしょう。あの人に教えて貰ったらどうですか？」

と自分の技術を教えるのは正直面倒な上に殺しに特化させているので危険すぎるのだ。

「いや、千冬姉は嫌がるだろ。それ、えこひいきっぽく見られるのも嫌だしな」

「それだつたら先輩や篠ノ乃さんが居るでしょう？」

「いや、其れも有るんだけど。やっぱり勉強の時に凄いい判りやすかつたし、ISも詳しくそうだし。……それに他の女子よりは気が楽だし」

と最後一夏は此方を口説く気でもあるのかそう言ってきた。

「……はあ、判りました。私の訓練キツイですけど、其れでもやりますか？」

と頭に手を当てながら目だけ一夏に向けてそう聞いた。

「ああ、強くなれるんだつたら幾らでもやってやるさー！」
とやる気だけは十分なように言ってきた

「判りました。それでは明日の放課後から始めましょうか」
と言った瞬間一夏が此方の右手を掴みぶんぶん振りながら有難うと
言ってきたが

直ぐにフェリシアは一夏の手から逃れるように右手を自分の胸もと
に持って行って

「嬉しいのは判りましたけど、帰って下さい。もう眠たいので」
と言って立っている一夏の背中を押して外へと追い出した。そして
外へと追い出した後鍵をかけていた。

「危ない所でしたね。……全くあと少しではれる所でしたよ」
そう言いながらずれてきた袖から戦場で着いた大きな傷跡が出て来
ていた。

フェリシアは、もしこれが誰かにでも見られたら自分がこの学園に
居られる事が出来ないと思ひ隠し続けているのだ。昔から多くの人
間は自分の近くに異物が有るのを嫌う物だ。例えそれが大きな理由
が有ったとしても化け物が近くに居るだけで『消える・死ぬ・出て
くるな』等同じ人間にかける言葉とは思えないのだ。故に彼女は其
れを言われるのを恐れ傷を隠し続けているのだ。

そして次の日の朝

「それでは一年一組織班一夏くんに決まりです。あ、一繋がりです
いんですね！」

そう言つて山田先生が嬉々として喋っていた。そしてクラスの女子
も大いに盛り上がっていた。だが一夏だけが暗い顔をしていた

「先生質問です」と一夏が質問をしていた

「はい、織斑君」

「俺は昨日全試合負けたんですが、なんでクラス代表に成ってるんでしょうか？」

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

「此れ以上の決闘は面倒だから辞退しただけです」

「まあ、勝負は貴方の負けでしたがしかしそれは考えてみれば当然の事。何せわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方ない事ですわ」

「それで、まあ、わたくしも大人気なく起こった事を反省しまして」

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表となれば戦いには事欠きませんもの」と喋っているが

一夏は何故美空が辞退したのか理由が良く判らず

「美空は何で辞退したんだ？」と聞いてきたが

「どうやらこの学園では、私が気に食わない人が多いようですから出ないだけですよ」

そう言っただけで話を打ち切っておいた。ただ一夏は何の事か疑問に成って居たが周りの女子はギクリと顔が変な事に成って居た。

そして無理やり話題を変えるように

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せつかく世界で唯一の男子が居るんだから、同じクラスに成った以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君は」

「それですわね。私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパ
ーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみ
るみるうちに成長を遂げ
」
とセシリアが何か言っている最中にバンツと言う音が鳴り響いた

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が教えるからな」
と鬼気迫った顔でセシリアに話していたが

「いや、俺美空に教えて貰う予定なんだが…」
と一夏が要らない爆弾を投下したせいで一斉にクラスの視線がフ
ェリシアへと向いた。

そして直ぐに「如何言う事だ（ですか）一夏（さん）！」と言って
近づいて行き

「何でよりもよってこんな奴に教えて貰うんだ！」

「何でこんな方に指導して貰うんですか！」

と篠ノ乃とセシリアが此方に指差していたが

「座れ馬鹿ども」

と千冬先生が何時の間にか入って来ておりセシリアと篠ノ乃の頭を
出席簿でバシンと言う音共に出席簿で叩いていた

直ぐに二人とも席へと戻って行ったが恨ましげな眼は確実に此方へ向いていた

「さて、一つ教えておくが岡田はお前等より強い。簡単に言えばこのクラス全員が束に成っても返り討ちに会うだろう。だがそれが如何した事かISが多少変とは言え畏怖や侮蔑の目を向けたのは私がクラス担当に成ってから許さん！」
と千冬先生は決闘時で既に観客の視線に気づいていのかそうクラス全員に対して言い放った

直ぐにクラスメイトも意外そうな顔をしていたが

「織斑先生 私は気にしてないので大丈夫です。畏怖や侮蔑の目にはもう慣れましたから」
そう言ってフェリシアは今も感じている侮蔑の目を受けつつも始まって行く授業に耳を傾け始めた

第五話 クラス代表決定戦（下）（後書き）

フェリシア「成るほどね。作者はこんな事で怒ってたわけね」

抹茶「ええ、自分の作品に愛着は沸きますがキャラが馬鹿にすることだけは許せません」

フェリシア「気にする事は無いわ。私はもう慣れたんだから」

抹茶「気にしますよ。例え貴方が架空の存在とは言え、それでも誰かを除け者にして良いってのはだめですよ」

フェリシア「なんか力説してるのは裏がありそうね。まあ良いわ」

抹茶「誰にだって裏は有りますよ。ただ信用無い人には話す必要がないだけです」

フェリシア「あらら、私みたいになっちゃダメよ？取り敢えず後書きも閉めましょうか」

フェリシア・抹茶「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次回お楽しみに！」

ご指摘・ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれば直します

お知らせ

この度『ISS〜復讐を願った少女〜』の執筆を辞めようと思っております。

今まで読んで下さった読者の方々には申し訳ありませんが此れ以上はとて書けません。

理由としては

- ・ストーリーを入念に練らず行き成りこの作品を始めてしまった自分の愚かな思考
 - ・書いてても自分が楽しくなくて書く気が起きない
 - ・リアルでの生活が忙しくて小説に回せる時間が無い等
- と読者の方々にはとてつもなく迷惑・怒りを感じてしまう事でしょうが、

許してくだされば嬉しく思います。

また許せないと思っただ方は感想の悪い点・一言などで罵言を下さっても構いません。

ですがリアルな生活が落ち着いたら時再びISSまたは別作品を書かせて貰うかも知れませんが

その時はストーリー構成・展開・キャラ設定等を入念に練り再び書こうと思います。

第六話 失われた記憶（前書き）

抹茶「正直調子が良いかも知れませんが、自分は再びこの小説のオリジナルキャラクターを動かしたいと思ったので再び書きました。きつと更新は亀並みに遅いでしょうがそれでも書こうと思います」

第六話 失われた記憶

「では、これよりISの基本的な操作を実践してもらおう織斑・オルコット・岡田試に飛んでみる」そう言われ三人同時に展開を済ませていた

（何とか出来てますね。…しかし私が教える前は展開までノ口とは思いませんでしたね）

とフェリシアは一夏の方を見てそう思っていた

そうフェリシアは一夏からIS訓練を頼まれた次の日から訓練していたのだがあまりのISの展開の遅さに頭を抱え込んだがヒントを与えると直ぐに飲み込むので良くも悪くも見込みのある操縦者だと彼女は評価していた。

そして千冬先生が3人を確認すると

「よし、飛べ」と言われ3人同時に目標地点まで飛ぶがセシリアが速く先行し一夏がそれに着いて行くようにスピードを上げて追いかけていく、フェリシアはそれを見て呆れながらも二人に着いて行っていた

そしてゆっくり飛んで目的地に着くと

「遅いですわね、岡田さん あの時私を倒したのはやはりまぐれですか？」

とセシリアが挑発するように言ってくるが

「……」とフェリシアはセシリアに興味等無し、とでも言うように無言を貫いていた

「ねえ、一夏さん、やはり岡田さんよりも私セシリア・オルコットの指導を受けませんか？」
とセシリアは諦めず一夏を誘おうとするが

「いや、俺は「一夏！何時までそんな所に居る！早く降りてこい！」
と一夏の通信回線越しから聞こえる篠ノ乃の声に僅かに苛立ちを感じながら

「織斑先生 次は何をやれば良いでしょうか？」
と次の指示を仰いでいた

「次は急下降と完全停止をやってみせる。目標は地表から100mだ」と次の行動の指示が来たので

「了解。……では代表候補生殿 偉そうに言うならピッタリやってみて下さいよ。出来るんでしょう？」とフェリシアは一目見ても判るほどの挑発をしていた。

普通に考えれば挑発で相手を怒らす事を狙っていると判る発言だが相手が相手なので

「なっ！馬鹿にして！成功したら一夏さんの訓練を譲ってもらいますわよ！」
とまんまと挑発に乗った上に賞品に目が眩んだのかマトモに演算もせず降りていた。

そして地表に着いて出た数値は
「オルコット 七？だ。もう少しマトモな演算をしなかったのか？」

と千冬先生は疑問に成りそう言っていたが

「なっ！嘘ですわ！もう一度やらせ パァン！」
と頼もうとしていたが出席簿で叩かれていた

「馬鹿か、お前一人に貴重な時間が割ける訳が無いだろう。次！織斑・岡田の順で降りてこい！」と時間が無いのだろう遂には千冬先生からも急かされてしまった。

「美空さん 今回も何かアドバイス無いか？」と聞いてきた

「今回は自分で考えてください。何時も私が居るわけじゃ無いんですから」

とヒントを聞くことを許さずそう言ってしまったが

直後にフェリシアはヒントを与えなかった事を後悔してしまった。

何故なら次の瞬間 ギュンツ ズドオオンツ！！という

甲高い音と共に一夏が地面に激突していた。

そして直ぐに千冬先生が一夏に文句を言った後に目で

（ちゃんとコイツを指導しておけ馬鹿者）と訴えていた

「ハア、織斑さんは限度と言う物を知らないんですかね？」

とフェリシアは地表に居る人物に文句を言いつつもジ・エンドと協力して演算し地表に向かってブースターを吹かしていた。しかも一夏よりも速い速度でだ…。

誰もが

（（（撃墜二人目か）））

と思っていたが次の瞬間倒していた体勢を一瞬で戻し8基の棺桶を傘のように自分の周囲に展開させブースターを一気に吹かした。

直後周りに砂埃が巻き上がり吹き荒れたがフェリシアは地表に激突する事は無く地表丁度10?で待機していた。

だが「確かに合格だがもう少し周りに迷惑の掛けない降り方をしろ判ったな?」と有無を言わさない気迫で聞いてきた

「判りました。以後気をつけます」そう言って地表に改めて着地したが

「お前が言うか猫かぶりめ」「鬼の皮被ってるよりマシですわ」と何故か篠ノ乃とセシリアが再び喧嘩をしていた

だが最初から見ていた千冬先生は

「おい馬鹿者ども、邪魔だ。端っこでやってろ」と二人を押しつけて

「織斑 武装を展開しろ。それ位一通り岡田に習っただろう」

「はあ一応は、習いましたけど」

「よし、では始める」と言われ一夏は右腕を突き出して雪片式型を展開していた。

「一般的には早いけど次は0.3秒で出せるようになれ」と最初は褒めていたが次に難しい課題を言われていた

「セシリア武装を展開しろ」「はい」

そう言っただけでスターライトMK-?を展開していたが

「流石だな候補生。ただし、そのポーズを辞める。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ？正面に展開出来るようにしろ」

「で…ですが、これは私のイメージを纏める為に必要な」

「直せ。良いな」「はい」

と反論しようとしていたが此処で悪い癖を直さなければ戦場で大きな隙にも成るので危険なのだ。

「さて、此処まで二人の展開速度を見て貰ったが、この程度はルーキーのやる事だ。本当の熟練者は展開速度・展開個数も早く多くなければ成らない。…お前等には、その技術の一部を見せてやる。岡田 全武装を展開しろ」

と話の展開で嫌な予感を感じて居たがクラスメイト全員の視線は此方に集まり今更引けないのでため息を吐いて遠くに歩きはじめ自分の周囲に人が居ない事を確認すると

ショートカットカウルウェポン
(短縮 全武装)

と思った次の瞬間大人一人通れる隙間を作りながら全武装を僅か0.03秒で展開していた

「ふむ、流石だ。と言いたいが次からはセーフティを掛けてから展開しろ。暴発したら危険だ」とフェリシアも千冬先生から注意を受けていた。

「判りました。以後気を着けます」

そう言っただけで歯向かう事すらせず大人しくフェリシアは従っておいた

「さて今回は展開を見て貰ったが全員常に展開に成れておけ、如何

なる場合でも早く武装を展開してダメージを与えられる事は有利だ」と話している最中に授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いていた

「時間か 今日の授業は此処までだ。織斑・岡田グラウンド片付けておけよ」

そう言われ地面に空いてる穴を見て思わずため息を吐いてしまったが

「美空此処は俺一人でやるから先に戻っていて良いぞ？」
と一夏が嬉しい提案をしてくるが

「大丈夫です。私が貴方に助言しなかったからこうなったんですから私にも責任は有ります」そう言ってフェリシアは織斑と一緒に穴埋めの作業を始めた。

そして放課後時たま傭兵稼業は休業中にも拘らず自分に依頼を頼んでくる人達が居るので仕事お断りのメールを返信する為にPCを起動させたが一件だけ個人的な要件のメールが来ていた。

少し訝しげに思ったが中身を確認する為にメールを開いた。

だが其処に入っていたのは文字ではなくボイスレコーダー一本だけだった。そしてフェリシアはメール開いた事以外何の操作もして無い筈だがレコーダーが唐突に再生された。

「こんにちはクロムウェルさん。あなたが探している物は見つかったかしら？」

と言われフェリシアは驚きを隠せていなかった。復讐に着いては特定の人物以外話していない筈だが何故この人物が知ってるのか謎に成った。

ふふっ、画面の向こうでは貴方は何で知ってるのか驚いてるんじゃないかしら？

でも、其れは仕方ないわ。私は貴方の全てを知ってる者なんだから…因みに貴方が壊そうとしている物・其れの居場所・貴方が知ろうとしてる真実と記憶もね

おっと本題から逸れたわね。今回だけお姉ちゃんが教えてあげる。貴方の探している『六本腕』今回のクラス代表戦だったかしら？その日襲撃してくるわ。せいぜい無様に負けない様に準備する事ね。貴方の装備は完全にスロットに入れてないんでしょ？

そうして録音されたレコーダーは止まりメール自体消され逆探知すら不可能に成っていた。

だがフェリシアはそんな事よりも吐き気を催す様な頭痛に堪えていた。

（さっきのは、一体誰…なの？私に姉さんなんて居ない筈なのに…。それにしても何処かで聞いた声なのに何で思い出せないの？）

と彼女は所々抜けている自分の記憶を思い出そうとしたが余りの頭痛の痛みに堪えきれずフェリシアは意識を失って床に倒れ込んだ。

第七話 過去と生徒会長（前書き）

抹茶「完成じゃああああああああ！」

フェリシア「五月蠅いわね。テンション高い作者は鬱陶しいわね」

抹茶「ヒデエ そんな事言わないで下さいよ」

フェリシア「ふん 貴方なんてその程度で良いのよ。それよりも少しだけ私の過去が明かされるの？」

抹茶「はあ？何を言ってるんですか貴方は？本当の記憶の過去では無くて人脈の過去ですよ」

フェリシア「クツ！この作者鬱陶しいわね。本当に撃ちたいわ。でも駄目よ落ち着きなさい私此処で撃つたらまた続きが」

抹茶「はっはっはこれが終わる時には俺撃たれるんだろうか？……怖いなあ」

フェリシア「そんな事しないわよ…多分」

抹茶「まあ、しない事を願いますが、そろそろ本編入りますか」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみください！」

第七話 過去と生徒会長

「ん？…此処は？」とフェリシアは目を覚まし体を起こしていた。

（大丈夫ですかマスター？先ほど倒れて何度呼びかけても起きないのでですから心配しましたよ）

（そう、心配かけてごめんねジ・エンド。それよりも此処は何処なの？）

と見覚えのない部屋を見てそう思ってしまったが

「漸く目が覚めたか大丈夫か？」と正面のカーテンが開き千冬先生が体調を聞いてくる

「ええ、大丈夫です。それよりも此処は何処ですか？」

とフェリシアは自分が今何処に居るのかずっと疑問に成って居たので聞いてみた

「医務室だ。家の弟が何時まで経ってもアリーナに来ないから心配して見に行ったら倒れてたらしい。…一応此処まで運んで来てくれたんだから感謝位しとけよ」

と千冬先生から言われたがフェリシアは何も言葉を返さずベットから降り医務室から出ようとしたが

「お前が何を隠しているのかは知らないが困った時は私に話せ力に成ってやる」

と一般の人から見れば心強い助っ人を得たようなものだが

「必要ないです。私は今まで一人でやってきました。だから今更誰

かに助けて貰おうなんて思いませんよ」「そう言つと医務室を出て自分の部屋へと向かつて行つた

〔千冬SIDE〕

「誰にも助けて貰おうとは思つてないか……」
と先ほど岡田が言つていた事を繰り返していた。

確かにISのクラス代表決定戦でも本気を出さずに候補生を叩きのめした上に周りからの畏敬の眼を向けられても冷静に対処し無視しているのだから実力的にも精神的にも充分過ぎる程の力が有るだろう。

だが「そんな事を言うなら何でお前は泣いていたんだ」

そう一夏が医務室に岡田を運んで寝かしたのだが夢の中で何を見たか知らないが唐突に呻きだしその直後に何かに謝りながら涙を流していたのだ。

「馬鹿者が……」と独りで解決しようとしている岡田に対して千冬は
そう愚痴つていた

〔SIDE END〕

（……ジ・エンド）フェリシアは自分の部屋に戻つて最中にパー
トナーを呼び出した

（何でしょうかマスター？）

（デュノア社に預けてた全武装を今すぐ送るようにメールをしてお
いてシモンさんだったら直ぐに私の武装を送ってくれるはずですよ）

（了解ですマスター　しかしあの人返事にまたマスターに養子に成

らないかってメールが返ってきますよ？)

(それはお断りよ。それにしてもシモンさんもシャルも私がデュノア家に籍を置くのを満更でもなさそうだし)

と再びあのメールが来ると考えると少々ウンザリしてしまったフェリシアだった

そうフェリシアはデュノア社の社長と関係が有り仲が良いのだ何故なら二年前デュノア社社長から直々にシャルロットの護衛を依頼されたのだ。しかしフェリシアは一か月間シャルロットの護衛を続けていたのだがシモンがシャルロットに会うたびに罵声を浴びせている事に嫌悪感を抱いて居る事に気づきアモンが一人に成った時に如何言う事か問い詰めた所シャルは愛人の子で本妻から『泥棒猫の娘を愛すな』と脅されていたらしいがフェリシアは社長の弱腰に『貴方の妻と愛人は貴方の仕事姿や良さに惚れて、貴方も二人の美しさや性格に惚れたのに片方だけ愛するなんてふざけるな!』と怒鳴ったのだ。

それから言いたい好きな放題言った後からという物毎度此方に対策を聞いてきたので『話し合え、話し合ってお互いが仲良くする方法を見つけれ。それが貴方のする事だ』と言って依頼を期間が来たと同時に打ち切ってデュノア社を去った。そして依頼を終わらせたその一週間後に再びアモンから呼び出され感謝されたので『私はシャルさんの事を思っただけです。まだ家族が残っているのに幸せに成れないなんて、そんなふざけた事許せません』とフェリシアは過去に両親を失って誰にも愛されなくなっていたのだ。

それに故に自分と限りなく似た境遇の人間を見ると仕事の事を忘れかけ感情的に成り助けてたくなるのだ。

それを知ったアモン社長は、復讐なんて辞めデュノア家に来ないか
と言ってくれたがフェリシアは敢えてそれを蹴り親の仇を討つまで
辞めないとだけ告げデュノア家から再び去ったのだ。

だがそれからと言うとシャルからはフランスに来た度に涙＋上目づ
かいで『僕と家族に成るのが嫌なの？』やらシャルに脅されたアモ
ン社長が『家族に成ってくれ！そうしないとシャルが口をきいてく
れないんだ！』等ある意味社長が可哀相な事に成っているのでフェ
リシアも遂に折れて『暇に成ったら遊びに行く』と言ったらシャル
も漸く頷いてくれたのだ。そして時たまフェリシアが思いついた武
器やISのアイデア等を送ると返信に採用されたアイデアのプ
ロトタイプが送られてくるのだが序に『家族に成らないか』という
内容までついてくるのだ。

(それよりもジ・エンドも気付いているよね？)
と別の事をずっと考えていたが何者かの気配を近くに感じそう思っ
ていた。

(ええ、良い加減にして欲しい物ですね。それで武装は如何します
か？)

(不必要よ。何時までも鬼ごっこ監視されるのもウンザリするか
ら半殺しにでもして相手の目的でも聞くわ) そう思っただけの鍵を
開けるのを辞め踵を返してトイレへと向かった。

「?????SIDE」

「あれがリベンジャーね」

と気配を隠してフェリシアに近づいているが

「全く油断も隙も無いわね。お姉さんは如何すればあの子の情報が

手に入れられるのかしら？」と過去を調べてくる物は無く特定のI
Sを探して居る事しか判らなかつたのだ。

（まあ、この学園で厄介な事をするなら無理にでも止めちゃうけど
ね）

そうして相手の思惑を考えているうちに部屋の前まで行っておりド
アノブに手をかけていたが急にその動きを止め別の場所に向かって
歩いていった。

（確かあつちは、お手洗いしか無かつた筈だけど何でまた…？）
と疑問に成つて尾行を続けていたが何も起きる事は無く手洗いを済
ませたフェリシアは自分の部屋へと歩を進めていた。

一瞬彼女は自分の考えは杞憂で終わるのかと思つたが次の瞬間

「動かないで下さいね？ああ、因みに動いたら容赦なく殺すので」
と冷ややかな声とともに自分の首の前面にコンバットナイフを突き
つけられていた。

「それで今まで私の監視を続けて来たようですが、結果が得られず
に遂には痺れを切らして当主まで出てきましたか。…それとも単な
る興味本位ですか生徒会長更識楯無殿？」

と背中にはもう一本のナイフを突きつけられた上に他にも威圧感が
受けているので複数居るのだろう

「じゃあ単刀直入に聞きましょうか、傭兵の貴方が何故このI S学
園に来たかしら？もしかして任務で来たのかしら例えば男の操縦者
を捕まえて来いとかの命令かしら？」

「貴方にそれを言う必要が有ると思っっているんですか？まあ良いで

しょう。正直あんな小者に興味等ありませんよ。仮に私がその命令を受けているなら既に強硬手段でも取って奪い去ってますよ」

「そう…でも一つ覚えときなさい。この学園で暴れるのは、私が確実に貴方を止めて見せるわ」

「クスクスクス」とそう言った瞬間リベンジャーは堪えることすらせず笑っていた。

「何が可笑しいのかしら？」

「いえ、ただか貴方程度の實力で私を止めようなんて面白い事と言うなと思っただけですよ」

と言われるだけ言われたあと武装は何時の間に収納され感じて居た気配は消えうせていた。

「言ってくれるわねリベンジャー　でもその鼻何時かへし折ってあげるわ」

と手汗を僅かに掻きながらも消え去ったりリベンジャーに対してそう呟いていた。

〈SIDE END〉

第七話 過去と生徒会長（後書き）

フェリシア「思いつきり原作改造してきたわねこの作者は」

抹茶「仕方ないじゃないか！原作だとシャルの扱いが可哀想なんだもん！だから俺は女尊男卑を利用して此れを書いたんだ！」

フェリシア「そうなの。それよりも私と現生徒会長はどっちが強いのかしら？」

抹茶「えっ？ああ、戦場によって変わりますね。貴方が装備をフルカスタムした状態または預けた装備全て回収したら学園か荒野・市街地でやれば勝てますけど、水関連のある場所じゃ確実に負けますね」

フェリシア「まあ、生徒会長は水関連操るの得意だから仕方ないか、何時か対策を練らないとね」

抹茶「それを考えるのが作者の役目って大変だなあー（遠い目）」

フェリシア「せいぜい頑張りなさい、それよりも感想来てたらしいわね？」

抹茶「はい、アルカイナさん・Yuuさんご感想有難う御座いました」

フェリシア「さて今日は此処までかしら？」

抹茶「そうですね。じゃあ久々にあれやりますか」

フェリシア「仕方ないわね。やってあげるから感謝しなさい作者」

フェリシア・抹茶「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次回お楽しみに！」

ご指摘・ご意見・ご感想ありましたらドンドン言っして下さい
あと誤字脱字などもありましたら注意してくれば直します

第八話 姉と妹（前書き）

抹茶「大・完・成！！」

フェリシア「テンション以上に高いわね」

抹茶「仕方ないじゃないか第八話内容ニパターン有ってどっち選ぶか悩んでたんだよ！」

フェリシア「ふーん、それで今回の題名は『姉と妹？』如何言う事ですか？」

抹茶「まあ、読めば判るよ。それに姉妹言ったらアイツら以外居ないし」

フェリシア「誰だっけ…えーと楯n「アウトオオオオオオオオ」ムツー！」

抹茶「全く言おうとする何てけしからん奴」

フェリシア「女性の口を平気で封じる貴方もけしからんですよ？」

抹茶「すまん、それよりもそろそろ本編入ろうか？」

フェリシア「判った」

フェリシア・抹茶「それでは本編をお楽しみ下さい！」

第八話 姉と妹

(マスター 此れが織斑さんの訓練メニューに成ります)
そうジ・エンドが言つと起動させていたPC画面に訓練の一覧表が映し出されていた

(ふむ…限界を越えず尚且つ体力ギリギリまで使つての訓練ですか…まあ問題は、彼が途中で逃げ出さないかですね)と一覽に目を通した後にそう考え込んでいた

(まあ、その時はその程度の人間でしか無かつたって事でしよう。しかしマスター本当にこれで良かったんですか?)とジ・エンドが聞いてくるが

(構わないわ。元々お願いしてきた人間を教えといて途中で辞めるなんて酷い事はしませんよ。それに彼の訓練で体力を消費する事すらありえませんか。それよりも例の物はすべて完成してますか?)

(ええ、仕込みは上々。仮にあの天災が妨害してきたとしても私達は悠々と進めますよ)
そうジ・エンドが言った瞬間フェリシアは口の端をゆがめ

(ありがとうジ・エンド。ようやく…ようやく敵が討てるんですね。今まで長く感じてましたけど漸く終止符が打てますよ)と嬉々としてそう思っていたが

(それよりもマスター少々僕から気に成る点が有るのですが…)

(気に成る点?…何ですか?)

(僕達が討とうとしてる『六本腕』 何故マスターを狙わずに両親を狙う等という回りくどい方法を取ったんでしょうか?)

(確かに少々妙ですよ。ジ・エンドが欲しいなら先に私を狙いを定めて殺せば奪えた筈)

と先程ジ・エンドが言った事を考え始めたが

(『六本腕』はあの時私の存在を視認できなかったのかな? いや、でもあの時は私は両親と夕食を取って居た筈: もしかしてあの時『六本腕』は私に手が出せない状況に居たの?)

と考えてる内にフェリシアの中で幾つかの仮説が生まれてしまったが

(辞めですね。: 何を考えてるんですか自分は馬鹿馬鹿しい。結局『六本腕』が私の両親を奪ったのは明確なんだから迷いなんて必要ないですね)

と今まで考えていた仮説を振り払い教室まで向かって行ったが心のモヤモヤが取れる事は無かった。

そして教室の前まで着いたのは良いが誰かが入り口を塞いでいた。
一瞬フェリシアは誰? と思ってしまうがもう数分したらSHRが始まるので

「ちょっとすいません」そう丁寧に言ったはずだが

「何よ!」と喧嘩口調で言ってきたので

「其処に居られると邪魔なんですけど判ってるんですか? 道は貴方一人の物じゃ無いんですよ。其処らへん判って言ってるんですか?」
そう言うとツインテールの女性は少しだけ身を引き空けられた道を

通って中に入ったが

「美空おはよう それよりももう体は大丈夫なのか？」

とフェリシアにとってトラブルメーカーである一夏が話しかけて来たので

「あ…あんだ昨日一夏と昨日何やったのよ！」

と何を誤解しているのか判らなかつたがツインテールの女性の怒りの矛先が此方に向けられ頭を痛めそうになつたが

「別に何も無いですよ。ただ私が倒れてたのを織斑さんが発見して医務室に運んで貰つただけです。…それよりも織斑さん此れが貴方の訓練表なので一応目を通して置いて下さい。」

基本はオルコットさんが戦闘では私が担当しますので覚えて置いて下さい」

そう言うつとフェリシアは先程バックにしまつたレポート用紙を取り出し一夏に向かって投げていた。

「それじゃあオル「ちよつと待て。何で私は訓練に入れてないんだ？」…本気で言ってるんですか貴方は？」

と篠ノ乃は自分が訓練メニューの中に入って無い事に憤りを感じて居たが、其れを聞いたフェリシアは呆れた目で篠ノ乃を見ていた。

「はあ…まあ、良いでしょう。ハッキリ言うなら不要だからですよ。確かに織斑さんのIS白式はパワータイプ 打鉄と訓練し合うなら良い経験が積めます。ただそれは、私が居なかつたらの話であつて、本来私のISジ・エンドは万能型なんですよ。だから常に場に依じて近・中・遠距離を使い分ける事が出来るんですよ。それに今渡したレポートは打鉄と殺り合う以上に経験が積めるので、効率が良いんです。そして最後に言うのであればオルコットさんのブルー・デ

イアーズは既に織斑さんには見切られています。故にオルコットさんが此れ以上射撃武器で攻撃しても意味は無いでしょう。其処に打鉄が来て、射撃武器が無くただ殴る事しか出来ない欠陥機に何の意味が有りますかね？それだったら相手の射撃武器が見切れるように多種多様の武装を持つ私が相手した方が効率が良いんです。…それに貴方が篠ノ乃博士の妹と言ってもただそれだけのことでしょう？スタートラインは皆一緒に上に擬音でやり方を教えるようじゃなくてもじゃないですけど学ばせよ」

それだけ言うとフェリシアはバツグを机の上に置きセシリアの方に向いて

「それじゃあ此れから宜しくお願いしますね。オルコットさん。以前は貴方に暴言を吐いてしまいましたが、それは水に流して改めて仲良く成りましょう」

とフェリシアはばれないようにワザとらしい笑みを浮かべて手を差し出していた。

「え…ええ、此方こそ宜しく願いますわ。頑張つて一夏さんを鍛えましょうね」

と一瞬セシリアは気まずそうに筭の方に目を配った後笑顔で握手に応えてきた。

「ああ、それと今思い出しましたが、鳳鈴音さん後ろに鬼が居るのでさつさと帰った方が良いと思いますよ」そう告げると一瞬鳳は何のことか理解して無かったが

「鬼とは良い覚悟だな岡田…それよりも、もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れそして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません…」

と鈴はすぐごとドアから離れ教室に向かって行つたがフェリシアはこの後起きそうな面倒事に巻き込まれない様に席に着き顔を伏せていた。

そしてフェリシアの予想はある意味当たりクラス中の女子が一夏の席に向かって歩きだし質問していたが

バシンバシンバシンバシンバシン

「席につけ馬鹿ども　そして岡田も直ぐに寝るな」

と結局フェリシアも席に着いていても頭を叩かれていた

そして大人しく一日判り切っているISの訓練と座学を受けていたフェリシアだったが、やけに考え事をしていた篠ノ乃とオルコットは千冬先生からの出席簿アタックと山田先生による注意を多く受けていた。

そして昼休みフェリシアは絶対に鳳が一夏に会いに来るのをある程度予測して居た為一夏に話しかけられる前にさっさと屋上に向かって歩いていった。

（屋上）

「ふう、やっぱり此処は落ち着きますね。一番風を感じられる」
と誰も居ないと思いそう呟いてしまったが唐突に後ろから扉が閉まる音が聞こえ振り返ると眼鏡を掛けていた女子が居た。

服装から見るに同じ学年だと判ったが、何故かフェリシアはその顔に見覚えが有り疑問を覚えたが

（更識楯無の妹である更識簪ですよマスター。この人は確か調べだと劣等感を抱いている人でしたよ。そして織斑一夏によって倉持技研が白式に集中したせいで自分のISが完成されていない為今は、専用機持ちとは良い難い状態ですね）

（成るほど。そうでしたか、それよりもあのお姉さんに劣等感を感じて居る…ですか）

そう思うとフェリシアは少しだけ簪の手助けをしようと思っってしまった

（まあたマスターのお節介の始まりですか。…まあ、それもマスターの良い所ですけどね）

「はじめまして更識簪さんと近寄ってそう話しかけた。」

「……誰？」

「私ですか？私は岡田美空って言いますどちらで呼んでくれても構いません。それよりもISの事は大変でしたね」

「何で貴方が私のISの事知ってるの？…もしかしてあの人が命令してきたの？…近づくように」と疑問に成りそう聞いてきたが

「いいえ、違いますよ。多分ですが貴方の言ってる人は更識楯無さんの事ですね？私は一応ですが生徒会長殿と私は敵対しているんですよ。まあ正しく言うなら向こう側が勝手にと言った方が正しいか

も知れませんか。それに私はただ必要な情報を集めるのと貴方に対しての単なるお節介をしに来たですよ」

「そう…けどお節介いらない」

そう言うと簪は持っていた端末を立ち上げ作業を始めていた。

そしてフェリシアは数分して集中し始めた所を狙って画面を見ると
「ふむ…自分の専用機のデータ作成ですか」

「ッ！見ないで」

「そうは言われても、此処でやる貴方も悪い気がしますけどね。…
それよりもそれは自分の力で一から造ってるんですか？」
とフェリシアは気に成ってそう聞いていた

「そうだけど…貴方も周りの人みたいに私を馬鹿にするの？…もし、
そうなら帰って」

「いえ、馬鹿にする気等ありませんよ。寧ろ羨ましい位です。私も
自分のISは自分で整備しているのですが其処まで知識は無いんで
とフェリシアは自分から欠点を暴露していた

「ですから更識さんはもつと誇るべきですよ。そんな作業絶対とま
ではいきませんが、出来る人間なんて一握りしかいないんですから」
そう言うと簪は急に黙り込み

「そう……ありがとう」

そう言うと再び目の前の端末に目を向けてキーボードを打ち込んで
いたが簪は途中で急にその動きを止め

「ねえ…一つ…聞きたいんだけど良い？」
と顔は此方に向けず簪は聞いてきた

「何でしょうか？プライベート以外の事なら何でも言えますが」
とフェリシアが言いかえすと

「貴方に…姉妹って…居る？」

「さあ、判りません」

「判らない？…何で？…自分の事なのに」
と疑問に成り簪はそう言ってきたが

「一つ教えておくなら 私はですね記憶が所々抜けてるんですよ。
…この前姉を名乗る人物からメールが来ましたが私はその人の名前も顔も思い出せ無かったんです。だから判らないとしか答えられません。きつとですが私は、もっと大切な事も忘れてるかもしれませんね」とフェリシアは自分の事なのに馬鹿馬鹿しくなりつい苦笑してしまった。

「ッ！…ごめんなさい…言い辛い事だと思うのに」
と簪は自分の言った事を後悔し謝ってきたが

「構いませんよ。それより失礼ですが更識さんは、お姉さんに劣等感を抱いてるそうですね？」とフェリシアは申し訳ないと判って居てもそれすら気にせずそう言っていた

「何でそんな事を知ってるの？……仮にそうだとしても貴方には関係ない」

「そうですね。確かに私には、関係ないでしょうね。寧ろ他人が姉妹の仲を口出しするなとまで言えますよね。……だけど一つ勘違いしているようだから言わせてもらいますけど。貴方は貴方　お姉さんはお姉さんですよ」

「えっ？」と疑問に成りそう言いかえしてきていた。

「えっ？じゃないですよ。全く貴方がお姉さんに成れる訳無いでしょうが。あつ、別に責めてる訳じゃ無いですよ？皆　誰かの代わり……いや自分は誰にも成れないですよ。もし自分自身が他の誰かの変わるなら、それは神か化け物あたりじゃないんでしょうかね？だから更識さんは更識さん他の誰でも無い世界でただ一つの存在で有って誰かに劣等感を持つのも当然……でも実は言うとお貴方が考えるような完全無欠なんてこの世には何処にも居ないんですよ？」

「だって完全無欠な人間って事は痛い時に『痛い』って叫ぶ事をしてなければ悲しい時に涙を流したりもしない。そして妹を自分の身に傷を負ってまで庇うなんて事もしないでしょうね」

「それに……きつと貴方がお姉さんに劣等感を持つって事は、昔に差を見せつけられ、そして酷い言葉を掛けられたからですかね？そう例えば『ずっと無能のままでないさい』とかですかね？」
そう言った瞬間簪の体がビクンと震えてしまっていた。

「ッ！ごめんなさい。怖がらせるつもりは無かったですけどね。でもそれは、姉さんから貴方に対する優しさだと思えますよ？だって今そこは暗部を統括している組織ですから有能な者は目を着けられ取り込まれてしまいますからね。そして暗部となった物は当主の命令は絶対。『命を捨てる』と命令されたら捨てなければならぬ。故にそのような事が起きる前に敢えて有能を無能に見せかける事で

その子に被害を及ぼさない様にしてるのかもしれませんね」そう言う
うとフェリシアは立ち上がり屋上の出入り口まで進むと

「まあ、私が思うに姉妹と言う物はお互いを助け合い続けるような
関係だと思えますよ？この私の考えを貴方が如何思うかは、私には
知りませんが貴方の答えです。自分で納得するまで答えを探し続け
て下さい。まあ誰かに見て貰って話しかけて貰いたいなら何時まで
も自分の殻に閉じ籠る事を辞めて誰かに話しかけて協力しあってく
ださい。そうしない限り何時までも貴方は答えを見つけない事は多分
不可能ですから」

「まあ誰かと話すのが出るのが怖いなら…誰かを受け入れるが怖い
ならもう一度私に相談してください。最初位はタダで貴方の手伝い
をしてあげますよ。そして安心してくださいね。貴方自身を見てい
るのは、ちゃんと居るんですから」
そう言ううとフェリシアはわざと一つのデータを落として行きこの場
を去って行った。

(マスター 少々不味かったのでは?)とジ・エンドが心配してそ
う聞いてきた

(何が?私の過去を少しでも喋った事?それとも私たちの実戦デー
タをあげた事?)
とフェリシアはわざとらしく聞いておいた。

そう先ほどフェリシアが落として行ったのは簷が弄っていたISの

改善点の内容。そしてフェリシアとジ・エンドがずっとため続けていた実戦データだった。しかし実戦データと言っても先ほど落としたメモリーに入れたのは、この学園に来てから戦ってきたデータだけなので必然的に他の人からもデータを借りないとダメだろう。確かにフェリシアの各地で行ってきたデータを渡したら打鉄式は完全に出来るだろうがそれを行った瞬間フェリシアは簪に自分の正体がばれると思いほんの少々しか入れて無いのだ。

（両方ですよ。まだ核心部分を喋ってないとは言えもし僕達の事がばれたら確実に学園には居られませんよ？）

（その時は私の情報を持って居る人間を消すかIS学園に『六本腕』が来て用事が済んだら私が学園を去る二つの選択肢しかしませんよ）

（…そうですね、それよりもマスター時間は大丈夫ですか？もう織斑先生の授業始まってると思いますけど）とフェリシアも忘れようとしていたことをジ・エンドが言ってきたのでピシリと固まっていた。

（どうやったらあの攻撃防げるんでしょうね？）

とフェリシアは頭を悩めつつも出席簿アタックの防御法を考えて教室に向かったが結局フェリシアの作戦は虚しく頭部に出席簿の角っこが突き刺さっていた。

（放課後）

「それじゃ…そろそろ訓練しに行きましょうか織斑さん」

そう言っただけのカバンを持ってアリーナまで向かおうと教室を出たが

「判った。…それよりもあの訓練表見たけど幾らなんでも濃すぎる

ぞ？こつちの体力が持つかどうか」と愚痴りつつも着いて来ていたが

「織斑さん 先にアリーナに行つてオルコットさんと訓練をしててください。私は用事が出来ました」

そう言つとフェリシアは一夏の返事など聞きもせず少し遠くで此方を見ていた簪の方に向かつて歩を進めていた。

「少し早いですけど、更識さんもう答えは決まっただんですか？」
とフェリシアは簪の前でそう喋っていた

「うん…貴方の言つとおり少し早いけどISを完成させる為に手伝つて欲しい」

「手伝つてことは貴方のISの事ですよね？…だったらこんな場所じゃなくて別の場所に向かいますよ更識さん」そう言つてフェリシアは簪の手を引っ張つて整備室に向つて行った

（整備室）

「それでどこまで完成しているんですか」
とフェリシアは現状のISを確認する為にそう聞いたが

「岡田さんが置いて行ったデータのお蔭でシステム面はほぼ大丈夫

…でも」

「でも？」

「まだ少しだけ実戦データが足りない。美空さんのジ・エンドの動きも良いんだけど、この子が追い付けないから…別の人に…」
と最後だけ声を小さくして呟いていたやはり怖いのだろう。

「成るほど。知らない人に話しかけて頼むのが怖いんですね？」
とフェリシアがそう聞くと簪は肯定するように首を一回縦に振っていた

「そう…ですか。だったら知ってる人に頼めば良いじゃないですか
…例えば、生徒会長とか」

「え…お姉ちゃんに」

「そうですね。更識楯無さんに頼むんですよ。確かに更識さんにと
つてお姉さんは遠い存在かも知れませんが、何時までも目を背けないで面と向いて話し合いまししょうよ」
そう言つてフェリシアは打開策を提示したが

「でも…やっぱり…まだ私はお姉ちゃんが…怖い」

と言つてきたので流石にウジウジしすぎる簪にフェリシアはどんどん苛立ちを募らせていた

「私言いましたよね。『最初ぐらい手伝う事をします』ってだから
勇気出してお姉さんと会つて話しましょうよ。確かに貴方の思うように
相手が何を考えてるのか何を思っているのかが判らないから怖い
のは判ります。でも何時までそんな理由でウジウジして動き出さ

なきや貴方は何時まで経つても変われませんか？」

そして未だに決心がつかない簪に怒りを覚えたフェリシアは怒鳴って

「何時までも何も動き出さない自分が嫌じゃないんですか貴方は！
だったら転んでも血反吐を吐いても一歩ずつ進みなさい！確かに貴
方の道は険しくて茨の道かもしれないかもしれませんが皆同じです皆そ
の道を歩んでいるんです！だけど皆それは一人じゃ決して乗り越え
ていませんだから誰かと協力して一緒に道を歩いているんでしょう
が！だから貴方も何時までも誰かと関わらずに一人で険しい道を歩
かずに誰かと一緒に歩きなさい！その時は私が貴方の背中を押す位
の事はあげますから」

そう言うとフェリシアは簪の手を掴み生徒会室に向かって歩き出し
ていた。だが簪はそれを嫌がる事は無く大人しくフェリシアの手に
引っ張られつつも生徒会室に向かって歩き出していた。

そして生徒会室の前、簪は姉への劣等感からか予想通り恐怖と緊張
で震えており少しでも話しかけたら飛び跳ねるのではないだろうか
とフェリシアは考えてしまった。

「何時までも怖がってはダメですよ更識さん。ただ貴方の思っ
て居る事をやりたい事を貴方のお姉さんにありのままに言っただけで下
さい」

それだけを言うとフェリシアは遠目から眺める様に決め込む為に廊
下の端っこまで歩き出そうとするが

一つ有る事を思い出し再び戻ってきて

「ああ、更識さん まだ緊張するなら此れでも飲んでおいてくださ
い。きつと……きつと落ち着きますから」

そう言うとフェリシアは薬を渡してその場を去り簪はその薬を訝し

げに見つめた後に飲み込んでいた。

そしてフェリシアの言った通り薬を飲んだ直後に少し緊張がほぐれて来ていたので簪は怯える事無く生徒会室のドアを叩き中へと入って行った。

「これから先は見る必要は無いわね。じゃあジ・エンド戻ろうか」
そう言っただけ内容は聞く気は無いがきつと今頃仲睦まじく喋って居る事を容易に想像できていたフェリシアだった。

「判りました。しかしこれで良かったんですか？…更識さんの記憶から私達と会っては話した記憶を消して」とジ・エンドがきまらずそうに聞いてくる

「構わないですよ。元々簪さんは表の世界の人間 私のような血で塗れた人間との関わりなんて消しておいた方が幸せなんですよ」
そうフェリシアは顔を俯かせて呟いていた。

そう先程フェリシアが簪に渡していたのは、精神安定剤の効果も含めていますが大半は自分の記憶を消すようにカプセル内にナノマシンが大量に入っているのだ。そしてそれを飲んだ人は30分もしないうちにフェリシアとジ・エンドとの関係・話していた事全て忘れるよう設計してあるのだが如何せん錠剤一個が馬鹿に成らない程の値段の為其処まで利用できないが如何しても彼女は自分の本性そして自分と関係を持つ事で自分のせいでもその人が傷つく事を避ける為に薬を飲ませるか他人に敢えて冷たい態度を取って関係を作らない様になっているのだ。だが薬も未完成なのか一度はシャルとアモン社長

に服用させたが記憶が戻り二度目は効かないという事態に陥ったので今後は薬を飲ませた人間には必要以上に関わらない事を決めているのだ

そしてフェリシアは最後に生徒会室に繋がる廊下を少しだけ見ると仲睦まじく二人の姉妹が仲良く喋っているのを見て嬉しく感じその場を去って行ったが、フェリシアは最後まで気付くことは無かった。自分がその光景を見て涙を流して居る事に………

第八話 姉と妹（後書き）

フェリシア「成る程ね。後後のフラグを生存させながらも既に姉妹の仲を復活させておくと」

抹茶「そして危険な暗部に取り込まれないように裏の人間の記憶も消して置く」

フェリシア「一理あるんですかね此れ？」

抹茶「さあ？それでもフェリシアさんの決めた決断に私は何も言いませんけどねー」

フェリシア「何かむかつく発言ですね。それよりも感想来てたらしいじゃないですか？」

抹茶「ええ、Yu uさん・アルカイナさんご感想有難う御座いました」

フェリシア「ふむ、言う事は言っただし此れだけですかね？」

抹茶「多分終わりだけど。フェリシアさんは表の世界に戻りたいかい？」

フェリシア「何を言ってるの？もう血塗れた私は、あの眩しい所に何か戻れない…」

抹茶「……すみません。言い辛い事を」

抹茶・フェリシア「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次
回お楽しみに！」

ご指摘・ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれば直します

六本腕VSジ・エンド（前書き）

抹茶「ほいほい完成したよ」

フェリシア「へえ、今回は少し早いですね？」

抹茶「まあね、色々と思いつくもんだよ」

フェリシア「そう、それよりも今回は六本腕が出てくるんですかね？」

抹茶「そうですねーでも残念な結果に成るんだよねー」

フェリシア「へえ、じゃあそれは読んでからのお楽しみね」

抹茶「そうですねー、それじゃそろそろ前書き閉めますか」

抹茶・フェリシア「それでは本編をお楽しみ下さい！」

六本腕VSジ・エンド

五月クラス対抗戦織斑と鈴の決闘当日の日フェリシアは待ちに待っていた日に笑みを浮かべていた。だがその笑みは今まで鍛えていた一夏の成長を見る物の眼では無く得物が目の前まで近寄って来る事に嬉しさを覚えている表情だった。

そしてアリーナ前のゲートの通路で待機していたフェリシアは一夏が近寄ってくる的同时に目だけ向け

「織斑さん 此の数日間貴方に教えた技術は全てとは言えませんが、それでも中国代表『甲龍』の戦い方そして癖は教えて対処法戦闘方も教えました。故にそれを全て発揮すれば勝てますよ」そう言いながらフェリシアは歩き一夏とすれ違おうと

「いや、勝てるじゃなくて勝って下さい。でなければ今まで教えた技術は無駄に成ります。…それに貴方ほど呑み込みの良い人は中々居ませんでしたよ。だから精々頑張ってくださいね」それだけ告げてゲートから離れようと近づいて行くと

「ああ、やってやるさ！今まで美空とセシリアに習ってきたんだ。それを俺は無駄にはしない！」そう言うで一夏もアリーナに向けて歩きだしフェリシアはその事を聞いてほんの少し笑みを浮かべ

そして首に掛けていたロケットのペンダントを開き中の写真を見つめていた。そこには笑顔で立っている女の子とその子を優しい目で見つめていた両親の写真が中に入っていた。

(…………お父さんお母さん仇を討つたら直ぐに私も逝くからね)

そうフェリシアは思うとペンダントの蓋を閉めモニターに映し出されてきた白式と甲龍に目を向けていた。

未だに戦闘は始まっておらず何か会話していたが、フェリシアはその事よりも一夏が何か大きい白い包帯に包まれたものを持って居る事に気づきため息を吐いていた。

（全く、その武器は確かに貸すとは言いましたが、クラス対抗戦にまで持ち込みます普通？）とフェリシアは思いつつも決闘は始まり甲龍が異形の青龍刀を展開し襲い掛かっていたが一夏は武器すら展開せずバックステップで青龍刀を避けていた。

だが何時までも避ける一夏に痺れを切らしたのか鈴は肩に装備して居る衝撃砲を撃ち込もうとしていたが一夏もフェリシアもその行動に気づき一夏はずっと持っていた大きな物を自分の目の前に出して攻撃を防いでいた。

「全く鍛えてあげたのに遊ぶってふざけてるんですかね？」
とフェリシアは今の衝撃砲はギリギリと所で回避できる筈なのに教えての防御に苛立っていた。そして防御に使った物は、その包帯が緩まり中に入って居たものを晒し出していた。

其処に有ったのは、フェリシアの愛用の武器の一つともいえる深紅のクレイモアだった。そうフェリシアが一夏に渡した課題とは片腕一本で深紅のクレイモアを自由自在に振り回せる事をさせていたのだ。

だがそれなら刀を渡して鍛えさせれば早い話なのだが刀もクレイモアも攻撃手段は振りおろし・薙ぎ払い・突き・袈裟切り等殆ど同じことが出来る上に今彼が持っているクレイモアは一つ60？も有る

ので筋力増強+刀を持って攻撃時の俊敏さが上がるらせる為に持たせていたのだが、それだけでは訓練にはマトモに成らないので60?のクレイモア一本で射撃による迎撃をするフェリシアに一太刀浴びせると言う事なのだが、フェリシアは常に軽い殺気と瞬時加速を使い一夏の動きを鈍くさせ当たらない様にしていたのだが要約2日前に掠る事が出来成長を見る為にもう暫くクレイモアを貸していたのだがこのように成るとは正直予想外だった。

(これじゃあ、私の主力武器が減るじゃないですか：まあ、まだ奥の手は残ってるので一本や二本の損失は痛くないですね)

とモニターを眺め続けていると衝撃砲も当たらず青龍刀すらも簡単に受け流されていた鈴は多少焦っており防戦一方だった。が唐突にアリーナ全体に衝撃が走っていた。

そして次の瞬間アリーナ内に二機のISが侵入して来ていた。両方ともフェリシアと同様『全身装甲』で覆われており一機は深い灰色をしており手が異常に長く肩と頭が一体化していた。そしてもう一機は血の様に赤い赤色をしており鬼のような面をし両肩からは二本づつ腕が生えており背中にはX字を描くようにブラスターを着けて何かを探すように周りをキョロキョロしていた。

(ッ!.....遂に来てくれましたか『六本腕』 そろそろ行くこうかジ・エンド?)

そう自分のパートナーに問うと

(了解ですマスター ゲートアンロック開始.....完了。それでは行きましょうか)

そうジ・エンドが告げた瞬間フェリシアはジ・エンドを展開しアリーナ内へと入って行った。

「一夏SIDE」

「何なんだよこいつら」

と一夏は目の前の二機を見てそう呟いていた。

「何しに来たんだよ」

と一夏は目の前の二機にそう聞いたが、敵がそんな事は言ってくれる筈も無く灰色のISはビーム砲を連射して来ていたが一夏は美空に習っていた事を思い出し体を半身にして最小限の動きで回避していた。

そして六本の腕を持つ方の攻撃を備える為にクレイモアと共に雪片式型を展開していたが六本腕は此方に興味が無いとでも言うように此方には目を向けず奥のゲートに目を向けていた

「こつちには興味が無いのか?... だったら」と攻撃してこないなら先に灰色を潰して六本腕を潰そうと考えていたが

『織斑君！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧しに行きます！』と山田先生の声が拡声器越しに聞こえてきたが

「いや、先生達が来るまで俺達で食い止めます」

そう言うつと灰色の方に目を向け

「手伝ってくれ鈴。六本腕の方まで来たら俺ですら対処できない。だから先に灰色の方を倒そう」

「判ったわ。それよりもアンタ 私と互角ってどんな訓練してきたのよ」

と鈴は一夏の強さに疑問を覚えそう聞いてしまったが

「……………い…言えない……………」

それだけ言うと一夏は顔を青ざめ震えていた。それを見た鈴も過酷な訓練だと理解していたが今は目の前のISに集中し始めようとした次の瞬間ザシュ！と言う何かが斬れる音と共にアリーナ内が何かに包まれていた。

一夏も鈴もそれに多少の息苦しさを覚え何処から来ているのか発信源を辿ると同じ全身装甲を纏っていた岡田美空の存在だった。一夏は美空がこの息苦しさの原因だと判るが何故あれ程まで怒気と殺意を出しているのか疑問に成って居たが確かに彼女の目線の先には六本腕が居た。

（何で美空が此処に？扉はロックされて居た筈じゃ？）と一夏は疑問に成って居たが

「あんた何で此処に来てるのよ！此処は危ないからさっさと逃げなさい！」

と鈴が忠告を出して美空に怒鳴っていたが

「黙れ…貴方も私の邪魔する障害なの？…もしそうなら消えてくれる？」

と何時もの美空らしくなく殺気は鈴に向けられ鈴は今までに受けた事のない恐怖に身を震わせ動けなくなっていたがそのような事お構いなしとでも言うようにデザートイーグルを展開し銃口を鈴に向け

「シネ」

と冷たい声と同時に発砲していたが一夏は鈴を防ぐようにクレイモアの面で銃弾を受け止め

「何してるんだよ美空！鈴は仲間だろうが！」
そう言っている内に灰色のISは此方よりも先に美空に向かってビーム砲を向けていたが、ビーム砲は発射されることは無かった。何故なら撃とうとしていた左肩が付け根から切り落とされていたからだ。一夏もどうやって移動したのか理解できなかったが美空は中身に人が居るのかも知れないのに右肩を包み込む程の大きさを持つパイルバンカーを呼び出し灰色のISの胸部を貫き機能停止を確認すると灰色のISを腹部を蹴飛ばしパイルバンカーから抜き取っていた。

そして冷たい眼差しを六本腕に向けると同時に

「ようやく会えましたね『六本腕』：貴方を壊す為だけに今まで生きてきた。だからさっさと私の為に壊れて下さい」と自分たちが居るにも関わらず美空はそう告げていた。

だが一夏には、不自然な点が幾つか生まれて来ていた。

（要约会えた…？つまり美空は前に『六本腕』に遭遇している事になるのか？そして『貴方を壊す為に生きてきた』…此処までの憎悪は幾らなんでも可笑しすぎる。もし親を殺されたなら此処までの憎悪は……まさか！）と思い1か月前の事を一夏は思い出していた。

（確かに美空は『学園に来たのには大きな理由が有る』と言っていたけど最初は冗談とは思っていた。だけど本当に復讐を…？）と一夏はただ美空の目的が判らずただ眺める事しか出来なかった。

（SIDE END）

「もう逃がしませんよ『六本腕』その体で両親が味わった痛みを受けて貰う！」

そう言うとコンバットナイフを両腕に展開し突っ込んだが六本腕も落とされる気は無いのか一つ両腕から戟とバスターソードを展開しコンバットナイフを受け止めていたがフェリシアは直ぐにナイフを捨てパルチザンを展開し石突きで六本腕の首元に突き刺し棒高跳びの要領で上に飛び上がったが六本腕はパルチザンの柄を掴み振り回したのでフェリシアは遠心力によってパルチザンを手放し床に叩きつけられていたがすぐさまその場を飛びのいていた。何故なら次の瞬間六本腕がパルチザンを返すようにフェリシアに投げつけて来ていたからだ。

「全く厄介ですね。…やはり幾ら強くなっても冷静さを保たなければ六本腕には」

とだけ呟くと予定を変更し両腰に荷電粒子砲 両肩に4連装ガトリングを展開し連射していた。流石に格闘戦しか分が無いと判断したフェリシアはある程度撃ち込むと煙によって六本腕は姿が見えなくなりその場から飛び退いて遠距離から様子を見ていたが唐突に足を掴まれ何が起きたのか確認する為に足元を見ると六本腕が自分の足を掴んでいた。

何故此処に！？とフェリシアも思っていたが残った二本の両腕にドリルを展開していたので直ぐに何が起きたか理解したが体は動かず掴んだ腕は離れる事は無くフェリシアは一度空中に上げられると地面に叩きつけられていた

「ウツ！グツ！ガツ！」

とフェリシアは何度も体を床に叩きつけられシールドエネルギーも残り僅かに成りかけた所で要約六本腕は姿を現してきた。だがフェリシアはそれを狙っていたようにもう一度右手に巨大なパイルバンカーを呼び出し右目に押し付け貫いていた

此れによって何とか腕は離され六本腕は後ずさるとフェリシアを見つめ目的を果たしたのか二・三度首を振ると踵を返して去って行くうとしていた

「待ちなさい！……逃げな！私と戦え！」

と体力とシールドエネルギーは削られていたるにも関わらずフェリシアは未だに六本腕を睨み付けていたが

六本腕は今のフェリシアには興味は無いのか顔すら向けずそのまま去って行った。フェリシアは何とも言いがたい苦痛に苛立ちを隠せず拳を地面に叩きつけていた

六本腕VSジ・エンド（後書き）

抹茶「はい、今回はフェリシアさんのマケケー」

フェリシア「屈辱ですね。まさか自分の攻撃で敵を見失うとは」

抹茶「まあ、敵を甘く見たミス+冷静さを失った上での処理判断の遅さですね。今度から気を着けましょう」

フェリシア「そうですね。それよりも右腕を覆う程のピイルバンカ
ーってデカくない？」

抹茶「そうですね。でもあれ出力押さえてるから無傷で済んでる
んですよ？」

フェリシア「……え？」

抹茶「当然に決まってるじゃないですかあんなデカイ物リミッター
なしに使ったら腕に掛かる負荷は考えられませんよ」

フェリシア「そう…そうですね。それよりも感想来てたらしいじゃ
ないですか？」

抹茶「はい、Yuruさんご感想有難う御座いました」

フェリシア「さて、こんな所ですかね？そろそろ終わらせませうか
ね？」

抹茶「そうですねー。じゃあ閉めましょうか」

抹茶・フェリシア「フェリシア（私）は変わる事が出来るのか？次
回お楽しみに！」

ご指摘・ご意見・ご感想ありましたらドンドン言っして下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれば直します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7578v/>

IS 復讐を願った少女

2011年12月20日02時46分発行